

Title	18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成(上) : アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」とその周辺
Sub Title	La formazione dell' 《economia politica》 nel Settecento napoletano : intorno al ragionamento sul commercio in universale di Antonio Genovesi
Author	奥田, 敬
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1986
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.79, No.5 (1986. 12) ,p.508(58)- 522(72)
JaLC DOI	10.14991/001.19861201-0058
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19861201-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

18世紀ナポリ王国における

「政治経済学」の形成(上)

——アントニオ・ジェノヴェージ「商業汎論」とその周辺——

奥田 敬

序・近代南イタリア史研究とアントニオ・ジェノヴェージ

序

I. 啓蒙思想の受容と「商業汎論」の成立

II. 「商業汎論」の論理構造 (以上本号)

III. ジェノヴェージ「政治経済学」の位相—「奢侈」論をめぐって

IV. ジェノヴェージ「政治経済学」の意義と限界

ルネサンス以来の永い「沈滞」から漸く目覚めた18世紀のイタリア半島の各地に澎湃として湧き起こった啓蒙改革運動のうちで南イタリアのそれは些か特異な様相を呈する。⁽¹⁾都市国家が叢生した北イタリアと異な

注(1) イタリア啓蒙改革運動に関しては、Franco VENTURI, *Settecento riformatore*, Torino, Einaudi, 1969-, 特にその第1巻 *Da Muratori a Beccaria* [1969年刊]と第2巻 *La chiesa e repubblica dentro i loro limiti* [1976年刊]が必読文献である。最近刊行された第3巻 *La prima crisi dell'Antico Regime (1768-1776)* [1979年刊]と第4巻 *La caduta dell'Antico Regime (1776-1789)* [1984年刊・2分冊]では、著者の視線は西洋全域に拡大し、《イタリアというプリズム》を通して眺められた壮大な《思想の交流》のドラマを再現しており、18世紀研究の金字塔となっている。邦訳されているF. ヴェントゥーリ『啓蒙のユートピアと改革』加藤喜代志・水田洋訳、みすず書房、1981年刊 (*Utopia e Riforma nell'Illuminismo*, Torino, Einaudi, 1970²; 英訳, *Utopia and Reform in the Enlightenment*, Cambridge U. P., 1971) は、その膨大な業績のほんの一端を窺わせるにすぎないが、訳書の巻末に付せられた150篇余りの「著作目録」(1980年時点迄)は極めて有益である〔英・仏・独語の論文も多数含まれているのでは非参照されたい〕。尚、イタリア啓蒙思想の研究史に関しては、幾分古くはあるが、Gianni SCALIA (a cura di), *Illuminismo e riforme nell'Italia del Settecento*, Bologna, Zanichelli, 1970 が入門書としては適切な展望を与えている。18世紀及び19世紀前半(統一以前)のイタリアの通史としては、Giorgio CANDELORO, *Storia dell'Italia moderna*, vol. I. *Le origini del Risorgimento 1700-1815*, Torino, Feltrinelli, 1956 と Stuart WOOLF, *A History of Italy 1700-1860*, London, Methuen, 1979 が現在のところ最も標準的である。後者はエイナウディ社の『イタリア史』の第3巻 *Dal primo Settecento all'Unità*, Torino, Einaudi, 1973に「政治・社会史」として執筆されたものを原形としており、今日では英語版からのイタリア語訳も刊行されている(*Il Risorgimento Italiano*, 2 voll., Torino, Einaudi, 1981)。邦語文献としては、最近ついに翻訳されたG. プロカッチ『イタリア人民の歴史』全2冊、斎藤泰弘・豊下梢彦訳、未来社、1984年刊 (Giuliano PROCACCI, *Storia degli Italiani*, Roma-Bari, Laterza, 1968)の第2巻1〜3章を別とすれば、北原教「リソルジメントと統一国家の成立」、『岩波講座世界歴史 20』[1971年刊]所収や森田鉄郎編『イタリア史』[世界各國史 15]、山川出版社、1976年刊が部分的に言及しているだけで、本格的な18世紀イタリア史研究は我が国では殆ど皆無に等しい。但し、ロムバルディーア(ミラノ)啓蒙思想に関しては、堀田誠三氏の「ミラノの貿易差額論争—ヴェッリ『政治経済学』の課題—」(上)・(下)、名古屋大学『経済科学』第33巻1号・2号(1986年)を初めとする一連の研究、島津英郷氏の「ヴェッリ兄弟とベッカーリア」(1)・(2)、『南欧文化』第1号(1974年)・第2号(1975年)等の先駆的な業績が既に挙げられている。ナポリについても、啓蒙思想との関係で常に問題となる大思想家ヴィーコについては、上村忠男氏の「ヴィーコにおける知識の理論」、東京外国語大学海外事情研究所『研究報告』17(1985年)を初めとする研究が進められている。

り、南イタリアには領域的にも半島の3分の1余りを占める「ナポリ王国」が存在していたためである。《1860年以前の7～8世紀に及ぶ統一的な南イタリアの歴史は、イタリアの他地域と同じ地方史の水準ではなく、真正の国家史の水準で理解・判断されねばならない》——こうした観点に立てば、18世紀のナポリ啓蒙改革運動は、単にリソルジメント(イタリア統一)前史の一齣としてのみならず、地中海世界における極めて例外的かつ早熟な——それゆえにまた挫折した——国家・社会・経済の近代化の試みとして注目されよう。

このナポリ啓蒙改革運動の「始祖」と称されている人物がアントニオ・ジェノヴェージ Antonio GENOVESI (1713-69)であり、本稿はその「啓蒙思想」の核心とされる「経済学」が当時の南イタリアにおいていかなる意義を有したものであるかを思想史的に検討することを課題とする。

上述の如き問題設定に関連する範囲内で研究史の現状に簡単に触れておこう。

近年のイタリアの思想史研究は、ナポリ啓蒙改革運動の起源に関しても、17世紀後半以降ハプスブルグ支配下で官僚層として興隆してきた「(法律家)市民層」

ceto civile (togato) によるアルプス以北(英・仏・蘭)の新思潮(デカルト、ニュートン、ロック等)の受容の経緯を実証的に解明して、既にそこに重商主義的な政策への志向が含まれていたことを指摘している。こうした研究は、同時にまた、最近のスコットランド啓蒙主義研究が問題としているような「富と徳」の関係如何をめぐる議論が当時のナポリでも沸騰したことに早くから着目し、ジェノヴェージについてもその思想形成過程におけるヴィーコやドーリアからの影響を重視して、啓蒙改革運動の「始祖」としてよりも、むしろ18世紀前半のナポリ思想界における「啓蒙思想」の受容(「商業=富」のイデオロギー)とそれに対する「人文主義」的伝統の側からの批判(「徳」のイデオロギー)との間で激しく応酬された議論の到達点、両者の折衷乃至は「総合者」として評価するに到っている。

こうした動向に即応して、ジェノヴェージの生涯に渉る思想的行程を「哲学者から経済学者へ」と要約的に表現してきた通説的理解に対しても今日では大きな疑義がつきつけられている。ジェノヴェージの生涯を通奏する主題として「倫理」と「宗教」の問題があったことが確認され、「市民的な政治」の探究者、或は

注(2) Giuseppe GALASSO, *Mezzogiorno medievale e moderno*, Torino, Einaudi, 1965, p. 40. 尚、南イタリア史の通史としては、依然として Benedetto CROCE, *Storia del Regno di Napoli*, Bari, Laterza, 1925 がその「倫理的一政治的歴史」の方法〔クローチェ『十九世紀ヨーロッパ史』増訂版、坂井直芳訳、創文社、1982年刊の訳者解説「クローチェの主要歴史書(『ナポリ王国史』を中心に)」参照〕の是非に関わらず、古典的な位置を占めている。Giuseppe GALASSO, *Il Mezzogiorno nella storia d'Italia*, Firenze, Le Monnier, 1984² はその批判的継承を意図している。これに対して、マルクス主義的な社会経済史の立場から18世紀初頭から統一までの南イタリア史を叙述したのが、Aurelio LEPRE, *Storia del Mezzogiorno nel Risorgimento*, Roma, Editori Riuniti, 1969であり、グラムシの「歴史のブロック」の理論を歴史分析の内に活用している。18世紀南イタリア史に関しては、先年刊行された Anna Maria RAO, *Il Regno di Napoli nel Settecento*, Napoli, Guida, 1983 も小著ながら最近の研究動向を吸収して論点を手際よく整理している上、巻末にかなり詳細な年表と文献目録を備えていて必携の文献である。

(3) 例えば, Raffaele AJELLO, "Gli «afrancesados» a Napoli nella prima metà del Settecento. Idee e progetti di sviluppo", in: AA. VV., *I Borboni di Napoli e i Borboni di Spagna*, Napoli, Guida, 1985や Id., "Le origini della politica mercantilistica nel regno di Napoli", introduzione a: Franco STRAZZUOLI, *Le manifatture d'arte di Carlo di Borbone*, Napoli, Leguori, 1979等を見よ。

(4) Istvan HONT & Michael IGNATIEFF (ed.), *Wealth and Virtue. The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge U. P., 1983や J. C. A. POCOCK, *Virtue, Commerce, and History*, Cambridge U. P., 1985を参照。

(5) 代表的な研究としては, Raffaele AJELLO, *Arcana juris. Diritto e politica nel Settecento italiano*, Napoli, Jovene, 1976 と Vincenzo FERRONE, *Scienza Natura Religione. Mondo newtoniano e cultura italiana nel primo Settecento*, Napoli, Jovene, 1982の2点を挙げておく。両者ともジェノヴェージだけを主題的に論じたものではないが、「法の形式主義 formalismo への批判」(AJELLO)や「ニュートン物理学の受容」(FERRONE)を軸とした18世紀前半のイタリア思想史の展開のひとつの帰結点としてジェノヴェージを取り上げている。(尤も, AJELLO の場合は、本稿第3節で言及するプロジッジャを法の歴史的・社会的被規定性の主張者として非常に高く評価している。)

また「啓蒙の道徳」の提唱者等々といった様々な評価の試みがなされるに及んで、ついに「思想家」としての、また「改革者」としてのジェノヴェージの全体像が浮上しつつある。

しかしながら、ジェノヴェージ研究の殆ど皆無に等

しい我が国ではもちろん⁽¹⁰⁾、イタリアでの最近の研究においても、一体ジェノヴェージの「経済学」が何を課題としていたものかという点は必ずしも明確に論じられないままであるように見受けられる。

ここで「経済学」という場合、それは当然ながら上

注(6) かかる通説的理解が十分に吟味されぬまま標語的に流布した責任の一半はジェノヴェージ自身にある。知人に宛てた書簡の中で、経済学講座への就任間近なことをほのめかしながら、彼は次のような一節を認めたのである。《貴方の形而上学者 *metafisico* がまもなく商人 *mercante* になろうとしている、と聞いたら貴方はなんと仰るでしょうか? お笑いなさい! だが、本当なのです》(Lettera a Romualdo STERLICH, 23 febbraio 1754, *Lettere familiari*, a cura di Domenico FORGES DAVANZATI, Napoli, Terres nella tipogr. Raimondiana, 2 voll., 1774, in: Antonio GENOVESI, *Autobiografia, lettere e altri scritti*, a cura di Gennaro SAVARESE, Milano, Feltrinelli, 1962 [以下, Ed. SAVARESE と略記], p. 78)。この発言が人口に膾炙し、また、「世界で最初の経済学の教授」という呼称ばかりが徒に高められた結果、専ら経済学者としてのみ論議されたジェノヴェージ像は、彼を《社会科学におけるガリレオ》と讃えたコストディから、その主著を《生まれながらに老衰した書物》と酷評したフェッラーラに至るまで、甚だしい毀誉褒貶に晒される次第となった。経済学史上のジェノヴェージに対する評価の変遷については、Lucio VILLARI, *Il pensiero economico di Antonio Genovesi*, Firenze, Le Monnier, 1958, pp. 45-66 を参照されたい。L. VILLARI のこの書は、ジェノヴェージ研究に劃期をもたらした包括的な著作であり、ジェノヴェージのうちに《功利(効用)主義的な厚生経済学の包括的な提示》を認めた Joseph A. SCHUMPETER, *History of Economic Analysis*, Oxford U. P., 1954, p. 177 の指摘を展開させて、文字通りジェノヴェージの「経済思想」を、《「純粹」経済学の範囲内で、理論的スキーマに基づいて》裁断するのではなく、《ナポリ王国の現実」「応用された」経済学の経験的性格》を中心に据えて、その全体像の解明に努めたものである。ここでは、ジェノヴェージの思想的営為を、何よりも当時の南イタリアにおける「ブルジョワジー」の伸張を背景として把握する必要性が訴えられた。これは、同じ1950年代末頃、今日の隆盛の基を築きつつあったナポリ社会経済史学派の農業史研究の初期の成果を踏まえたものであると同時に、そうした研究の一層の深化を促すものであった。

1950年代後半以降、マルクス主義史学とは一線を劃しつつも、歴史的現実との生きた関わりの中で思想史を追求し続けてきた VENTURI が、18世紀イタリア啓蒙改革運動の群像を取り上げて精力的に世に問い始める。その最初の集大成と言うべき『改革の18世紀』第1巻では、「アントニオ・ジェノヴェージのナポリ」と題された第8章で18世紀中葉南イタリアのそれまでは殆ど無名に近い存在であった知識人達の活動を克明に浮彫りにすることで、「哲学者から経済学者への」ジェノヴェージの飛躍的転回を近代南イタリアの歴史的転換期の集約的表現として捉え、通説的理解の内容を一段と掘下げ・刷新することに貢献した。

Paola ZAMBELLI, *La formazione filosofica di Antonio Genovesi*, Napoli, Morano, 1972 は、こうして VENTURI によって面目を新たにした通説的理解を真っ向から否定するものであった。従来は研究者の注目を浴びることの少なかった30代のジェノヴェージのラテン語による哲学的著作類を再評価し、同時にまた、殆ど埋もれたままであった彼の初期の自伝草稿や『神学綱要』の草稿を詳細に検討した結果、若き日のジェノヴェージがこれまで考えられていた以上にヴィーコを初めとする前代の思想家達の影響を受けていたことが判明し、そこから更には、「哲学者ジェノヴェージ」と「経済学者ジェノヴェージ」との間の思想的主題の連続性が主張されるに至ったのである。

今日のジェノヴェージ研究が内包している、上述の如き「断絶説」と「連続説」とでも総括すべき見解の対立は、実は「ナポリ啓蒙」そのものの性格をどう捉えるかという根本的問題に関わっている。本稿は、もとより、これに対して最終的な断案を下そうなどと意図したものではない。さしあたりは、西欧近代思想史の共時的展開と南イタリア史の通時的展開との交錯点にジェノヴェージの姿を浮かび上がらせるべく努めて、問題の所在の一端を示唆したに留まる。

(7) Giuseppe GALASSO, "Il pensiero religioso di Antonio Genovesi", *Rivista Storica Italiana*, LXXXII(1970) 及び Id., "Il pensiero economico di Antonio Genovesi", in: AA. VV., *Nuove idee e nuova arte nel '700 italiano*, Roma, Accademia nazionale dei Lincei, 1977.

(8) Eluggero PII, *Antonio Genovesi dalla politica economica alla «politica civile»*, Firenze, Olschki, 1984.

(9) Fidia ARATA, *Antonio Genovesi. Una proposta di morale illuminista*, Venezia, Marsilio, 1978.

(10) ジェノヴェージについて幾分詳しく言及した邦語文献は、上原一男氏の「一八世紀イタリアの効用価値論」、『早稲田政治経済学雑誌』第268号(1981年)以外には、Georges-Henri BOUSQUET, *Esquisse d'une Histoire de la Science Economique en Italie*, Paris, 1960の邦訳(G. -H. ブスケー『イタリア経済学抄史』、橋本比登志訳、嵯峨野書院、1976年刊)しかない。

述の研究史的成果を踏まえた上での「倫理」的モチーフを内在させた「思想」としての「経済学」という意味であって、本稿における「政治経済学」という概念はこのように限定的に使用されている。そして、当時における「経済学」が、人間の諸「情念」、とりわけ「利己心」の承認に基づく「有用性」を原理とした社会認識の「方法」であったとしたら、こうした「手段」に対する「目的」こそが「政治」という限定詞の裡に含意されているといえよう。

「政治経済学」*economia politica*, *political economy*, *économie politique* というときの「政治」なる形容詞が「家政」に対する「公共の経済」或は「国家の経済」を指し示すために付加されていることは言うまでもなく、後で見るようにジェノヴェージもまたこれら両者の区別から議論を出発させている。だが、この「政治(的)」という限定詞は単に対象領域を区分するだけでは留まらない。古典古代以来の「ポリス」の

伝統に由来する「市民」にまつわるイメージがここには不可避的にともなっている。この点を考慮すれば、ジェノヴェージの最晩年の——そしてこれまでは専らこれのみが彼の経済学上の主著として扱われてきた——政治経済学的思索の集大成が『商業、あるいは市民の経済の講義』⁽¹²⁾と題されていることはなかなか意味深長であろう。

本稿は、しかし、この『商業、あるいは市民の経済の講義』(以下、『商業講義』と略記する)については必要な限りにおいて言及するにとどめ、その詳論は他の機会に譲ることにして、1757-8年に刊行された『グレート・ブリテン商業史』、特にその序説として執筆された「商業汎論」の分析に主眼を置く⁽¹³⁾。「商業汎論」と『商業講義』の二者の刊行を隔てる10余年の歳月は、とりわけその中頃に1763-4年の壊滅的な「大飢饉」⁽¹⁴⁾の経験を挟んで、ナポリ王国の現状認識の深化とあいまって、その後進性に対するジェノヴェージの焦

注(11) Albert O. HIRSCHMAN, *The Passions and the Interests. Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*, Princeton U. P., 1977 [アルバート・O・ハーシュマン『情念の政治経済学』佐々木毅・旦祐訳, 法政大学出版局, 1985年刊] 参照。

(12) *Delle lezioni di commercio o sia di economia civile*, Napoli, stamp. Simoniana, 1765-67, 2 voll. (2a ed., ivi, 1768-70, 2 voll.). クストディの『イタリア経済学古典叢書』近代篇第7~9巻所収のテキストは、この第1版をTroiano ODAZI (ジェノヴェージの死後暫く空席のままだったナポリ大学の経済学講座を1782年に再開することになる人物)が校訂してミラノのFederigo Agnelli書店から1768年に刊行(翌年にはヴェネツィア-実際は当時のイタリア出版業の一大中心地 Bassano の Remondini書店から再版)された普及版に基づいており、これに対してジェノヴェージ自身が最後まで手を加え続けていた「ナポリ版第2版」こそが決定版とみなされるべきだという指摘は、既に Franco VENTURI が“Le lezioni di commercio di Antonio Genovesi. Manoscritti, edizioni e traduzioni”, *Rivista Storica Italiana*, LXXII (1960) 他で行っている。

(13) 『商業、あるいは市民の経済の講義』の完全な校訂版は近く『アントニオ・ジェノヴェージ経済学著作集』*Scritti economici di Antonio Genovesi*, a cura di Maria Luisa PERNA (Collana «Economisti Meridionali» diretta da Luigi DE ROSA e da Luigi FIRPO), Napoli, Istituto Italiano per gli Studi Filosofici, 1984-の第3巻として刊行される予定であり、前注のような事情を勘案して、『講義』に関する主題的な論及はこの出版を俟つのが妥当であろう。

(14) *Storia del commercio della Gran Bretagna scritta da John Cary...con un ragionamento sul commercio in universale, e alcune annotazioni riguardanti l'economia del nostro Regno di Antonio Genovesi*, Napoli, Cessari, 1757-58, 3 voll. 本稿における引用は前記の『アントニオ・ジェノヴェージ経済学著作集』(以下, SE. と略記する)第1~2巻(1984年刊)所収のテキストに基づいている。尚、筆者はこの「商業汎論」の部分訳を『グレート・ブリテン商業史』全体についての簡単な書誌的解題を付して『三田経済学研究』第33号(1986年)に掲載しているので、本稿と併読されると幸いである。

(15) 1763-64年の「大飢饉」は近代南イタリア史上の大事件の一つであり、これを転換点として18世紀前半の農村における「近代的進化」の展開も挫折したという論点は、例えば、地域史レヴェルで精緻な人口・経済史的分析を行った Gérard DELILLE, *Croissance d'une société rurale. Montesarchio et la Vallée Caudine aux XVIIe et XVIIIe siècles*, Napoli, Istituto Italiano per gli Studi Storici, 1973 等も示唆している。【この時期のナポリの状況に関しては、Franco VENTURI, “1764: Napoli nell'anno della fame”, *Rivista Storica Italiana*, LXXXV (1973) が見事な全体史的叙述を行っている。また、この「大飢饉」を契機としていっそう白熱した穀物政策論争については、さしあたり、Paolo MACRY, *Mercato e società nel Regno di Napoli. Commercio del grano e politica economica del '700*, Napoli, Guida, 1974 等を参照されたい。

慮を殆ど絶望の極みに近い地点にまで追いつけていたとはいえ、その「政治経済学」の主題と構造に関しては基本的に一貫しており、却って小篇の「商業汎論」の方がそれを簡潔・鮮明に素描して、ナポリ啓蒙改革運動の初発の形姿を確認する場に相応しいと判断されるからである。

以下、第1節では、『グレート・ブリテン商業史』の刊行に到るまでのジェノヴェージを取り巻くナポリの思想状況を外来啓蒙思想の受容の経緯を軸として略述する。第2節では、「商業汎論」の論理構造の分析に即しつつ、その「政治経済学」が「勤労」の概念を縦糸とする「国民経済」形成の理論であったことを明らかにする。第3節では、この「政治経済学」が同時代の他のナポリの思想家達との間でいかなる位置を占めるものであったかを、「奢侈」の問題をめぐる論争を手掛かりとして検討する。最後の第4節では、以上の考察を踏まえて、ジェノヴェージの「政治経済学」の意義と限界を明らかにした上で、これを起点とするナポリ啓蒙改革運動の近代南イタリア史における位置付けを試みてみたい。

I

1747年、当時ナポリ大学で倫理学を講じていたアントニオ・ジェノヴェージは、前任者の転出によって空席が生じた神学教授の地位を得るべく公募に応じたが、既に1743年の最初のラテン語著作『数学的方法を採用せる形而上学原理』⁽¹⁶⁾や同じくラテン語で執筆された1745年の『批判的論理学原理』⁽¹⁷⁾の刊行以来一部の聖職

者のあいだでくすぶりつづけていた「理神論者」・「無神論者」という嫌疑がここで再燃し、手稿のまま回覧されていた『神学綱要』が14箇条の異端的命題を含むという提訴までなされるに及んで遂に断念のやむなきに至った。ナポリの宮廷とローマ教皇庁を少なからず震撼させたこの「事件」の過中で、ジェノヴェージはひとりの人物と巡り合った。トスカーナ出身の在野の「科学者」にして「実業家」バルトロメオ・インティエーリ Bartolomeo INTIERI (1678-1757)⁽¹⁸⁾である。

フィレンツェ近郊の下層の家に生まれたインティエーリは青年期にナポリに移り住み、独学で自然科学を習得し、数学の家庭教師等で糊口をしのいだ。やがてその才能を見込まれてメディチ家やラヌツォーニ家・コルシーニ家などのトスカーナの都市貴族が南イタリアに有する所領の総管理人となり、新しい農業技術の積極的な導入によってその経営に敏腕を示すかわら、教皇特使の出納役等も兼務して、着実に自らの資産も蓄えていった。ガリレオ的な実験科学の精神の鼓吹者として自然科学の技術への応用、その実用性を何よりも重んじた一《幾何学や代数学の書を読むのに全ての時間を費やししながら、その発展を心がけず、自分達の仕事の成果を享受しようともせぬ人々は、たいへんな非難に値しよう》と、1716年に著した『風力粉挽き場の改良設計』⁽¹⁹⁾の序文で述べるように。1732年には、宮内司祭長として事実上ナポリ王国の文化相・大学総長の地位にあったチェレスティーノ・ガリアーニ Celestino GALIANI (1681-1753)と共に、短命に終わったが「自然科学アカデミア」を創設し、ニュートンやロックの紹介・普及に努めた⁽²⁰⁾。

注(16) *Elementa metaphysicae in usum privatorum adolescentium mathematicum in morem adornata ab Antonio Genuensi in regia neapolitana Accademia philosophiae professore, expensis Bernardini Gessari, Neapoli 1743.* この著作は4部からなり、最後の第4巻が刊行されたのは1752年である。尚、ジェノヴェージは後にイタリア語でも形而上学と題した書物を執筆している。*Delle scienze metafisiche per i giovinetti, Napoli, stamp. Simoniana, 1763*で、19世紀前半に至っても度々再版されている。

(17) *Antonii Genuensis, Elementorum artis logico-criticae libri V, Typis Petri Palumbi, Neapoli 1745.* 後出注97の Enrico DE MAS の文献調査によるとこの書はジェノヴェージの死後、ワルシャワ、コイムブラ、アウグスブルグ等で再版されている。また、ジェノヴェージはこれもやはりイタリア語で論理学の入門書を出版している。*La logica per gli giovinetti, Napoli, stamp. Simoniana, 1766*である。

(18) *La vita di Antonio Genovese (1755年頃の執筆と推定されている自伝草稿), Riformatori napoletani, a cura di Franco VENTURI, «La Letteratura Italiana. Storia e Testi» vol. 46, Illuministi italiani, tomo V, Milano-Napoli, Ricciardi, 1962 (以下、RN. と略記する), pp. 59-70 参照。インティエーリについては、Franco VENTURI, «Alle origini dell'illuminismo napoletano. Dal carteggio di Bartolomeo Intieri», *Rivista Storica Italiana*, LXXI (1969) が基本的な文献である。*

(19) *Nuova invenzione di fabbricar mulini a vento di B. I. fiorentino...*, Napoli, Mosca, 1716—この著作は直接参照できなかったが、訳文は Vincenzo FERRONE, op. cit., p. 482 の引用によっている。

18世紀ナポリ王国における「政治経済学」の形成（上）

ジェノヴェージが知遇を得た頃には、インティエリは既にナポリ湾の対岸ヴィーコ・エクウェンゼの山荘に隠棲し、その周辺にはフェルディナンド・ガリアーニ **Ferdinando GALIANI** (1728-87) を初めとする若き秀英達の集うサークルが形成されていた。その一員となったジェノヴェージ自身が伝えているように、《人間理性の進歩、諸技芸・商業・国の経済・機械学・物理学の進歩》がそこでは絶えず話題にのぼり、それらを熱っぽく語り説くインティエリに《誰もが神託に対するごとく耳を傾けた》⁽²¹⁾のであった。この時期インティエリの脳裏を占めていたのは、《ヨーロッパのすべてのアカデミアには経済と商業の教授がいなくてはならぬ》という信念であった。再びジェノヴェージの伝えるところによるならば、

《何らの改編もなさずして過去数世紀の学問制度に従おうとするのは、未開のままに留まろうとすることではないか。人間理性は印刷術と諸国民間の商業のおかげで大いに進歩した。それ故、新しい思想・新しい事物・新しい生活様式・新しい思考の方法—すなわち観念や事実を計測する **calcolare** という方法が発見され、その結果、このうえなく実用的な様々な新しい科学が発見されるのだから、これらが民衆の最下層にまで普及するようになくなくてはならない。以前のように思弁にばかり耽⁽²²⁾耽⁽²³⁾耽⁽²⁴⁾耽⁽²⁵⁾耽⁽²⁶⁾耽⁽²⁷⁾耽⁽²⁸⁾耽⁽²⁹⁾耽⁽³⁰⁾耽⁽³¹⁾耽⁽³²⁾耽⁽³³⁾耽⁽³⁴⁾耽⁽³⁵⁾耽⁽³⁶⁾耽⁽³⁷⁾耽⁽³⁸⁾耽⁽³⁹⁾耽⁽⁴⁰⁾耽⁽⁴¹⁾耽⁽⁴²⁾耽⁽⁴³⁾耽⁽⁴⁴⁾耽⁽⁴⁵⁾耽⁽⁴⁶⁾耽⁽⁴⁷⁾耽⁽⁴⁸⁾耽⁽⁴⁹⁾耽⁽⁵⁰⁾耽⁽⁵¹⁾耽⁽⁵²⁾耽⁽⁵³⁾耽⁽⁵⁴⁾耽⁽⁵⁵⁾耽⁽⁵⁶⁾耽⁽⁵⁷⁾耽⁽⁵⁸⁾耽⁽⁵⁹⁾耽⁽⁶⁰⁾耽⁽⁶¹⁾耽⁽⁶²⁾耽⁽⁶³⁾耽⁽⁶⁴⁾耽⁽⁶⁵⁾耽⁽⁶⁶⁾耽⁽⁶⁷⁾耽⁽⁶⁸⁾耽⁽⁶⁹⁾耽⁽⁷⁰⁾耽⁽⁷¹⁾耽⁽⁷²⁾耽⁽⁷³⁾耽⁽⁷⁴⁾耽⁽⁷⁵⁾耽⁽⁷⁶⁾耽⁽⁷⁷⁾耽⁽⁷⁸⁾耽⁽⁷⁹⁾耽⁽⁸⁰⁾耽⁽⁸¹⁾耽⁽⁸²⁾耽⁽⁸³⁾耽⁽⁸⁴⁾耽⁽⁸⁵⁾耽⁽⁸⁶⁾耽⁽⁸⁷⁾耽⁽⁸⁸⁾耽⁽⁸⁹⁾耽⁽⁹⁰⁾耽⁽⁹¹⁾耽⁽⁹²⁾耽⁽⁹³⁾耽⁽⁹⁴⁾耽⁽⁹⁵⁾耽⁽⁹⁶⁾耽⁽⁹⁷⁾耽⁽⁹⁸⁾耽⁽⁹⁹⁾耽⁽¹⁰⁰⁾耽⁽¹⁰¹⁾耽⁽¹⁰²⁾耽⁽¹⁰³⁾耽⁽¹⁰⁴⁾耽⁽¹⁰⁵⁾耽⁽¹⁰⁶⁾耽⁽¹⁰⁷⁾耽⁽¹⁰⁸⁾耽⁽¹⁰⁹⁾耽⁽¹¹⁰⁾耽⁽¹¹¹⁾耽⁽¹¹²⁾耽⁽¹¹³⁾耽⁽¹¹⁴⁾耽⁽¹¹⁵⁾耽⁽¹¹⁶⁾耽⁽¹¹⁷⁾耽⁽¹¹⁸⁾耽⁽¹¹⁹⁾耽⁽¹²⁰⁾耽⁽¹²¹⁾耽⁽¹²²⁾耽⁽¹²³⁾耽⁽¹²⁴⁾耽⁽¹²⁵⁾耽⁽¹²⁶⁾耽⁽¹²⁷⁾耽⁽¹²⁸⁾耽⁽¹²⁹⁾耽⁽¹³⁰⁾耽⁽¹³¹⁾耽⁽¹³²⁾耽⁽¹³³⁾耽⁽¹³⁴⁾耽⁽¹³⁵⁾耽⁽¹³⁶⁾耽⁽¹³⁷⁾耽⁽¹³⁸⁾耽⁽¹³⁹⁾耽⁽¹⁴⁰⁾耽⁽¹⁴¹⁾耽⁽¹⁴²⁾耽⁽¹⁴³⁾耽⁽¹⁴⁴⁾耽⁽¹⁴⁵⁾耽⁽¹⁴⁶⁾耽⁽¹⁴⁷⁾耽⁽¹⁴⁸⁾耽⁽¹⁴⁹⁾耽⁽¹⁵⁰⁾耽⁽¹⁵¹⁾耽⁽¹⁵²⁾耽⁽¹⁵³⁾耽⁽¹⁵⁴⁾耽⁽¹⁵⁵⁾耽⁽¹⁵⁶⁾耽⁽¹⁵⁷⁾耽⁽¹⁵⁸⁾耽⁽¹⁵⁹⁾耽⁽¹⁶⁰⁾耽⁽¹⁶¹⁾耽⁽¹⁶²⁾耽⁽¹⁶³⁾耽⁽¹⁶⁴⁾耽⁽¹⁶⁵⁾耽⁽¹⁶⁶⁾耽⁽¹⁶⁷⁾耽⁽¹⁶⁸⁾耽⁽¹⁶⁹⁾耽⁽¹⁷⁰⁾耽⁽¹⁷¹⁾耽⁽¹⁷²⁾耽⁽¹⁷³⁾耽⁽¹⁷⁴⁾耽⁽¹⁷⁵⁾耽⁽¹⁷⁶⁾耽⁽¹⁷⁷⁾耽⁽¹⁷⁸⁾耽⁽¹⁷⁹⁾耽⁽¹⁸⁰⁾耽⁽¹⁸¹⁾耽⁽¹⁸²⁾耽⁽¹⁸³⁾耽⁽¹⁸⁴⁾耽⁽¹⁸⁵⁾耽⁽¹⁸⁶⁾耽⁽¹⁸⁷⁾耽⁽¹⁸⁸⁾耽⁽¹⁸⁹⁾耽⁽¹⁹⁰⁾耽⁽¹⁹¹⁾耽⁽¹⁹²⁾耽⁽¹⁹³⁾耽⁽¹⁹⁴⁾耽⁽¹⁹⁵⁾耽⁽¹⁹⁶⁾耽⁽¹⁹⁷⁾耽⁽¹⁹⁸⁾耽⁽¹⁹⁹⁾耽⁽²⁰⁰⁾耽⁽²⁰¹⁾耽⁽²⁰²⁾耽⁽²⁰³⁾耽⁽²⁰⁴⁾耽⁽²⁰⁵⁾耽⁽²⁰⁶⁾耽⁽²⁰⁷⁾耽⁽²⁰⁸⁾耽⁽²⁰⁹⁾耽⁽²¹⁰⁾耽⁽²¹¹⁾耽⁽²¹²⁾耽⁽²¹³⁾耽⁽²¹⁴⁾耽⁽²¹⁵⁾耽⁽²¹⁶⁾耽⁽²¹⁷⁾耽⁽²¹⁸⁾耽⁽²¹⁹⁾耽⁽²²⁰⁾耽⁽²²¹⁾耽⁽²²²⁾耽⁽²²³⁾耽⁽²²⁴⁾耽⁽²²⁵⁾耽⁽²²⁶⁾耽⁽²²⁷⁾耽⁽²²⁸⁾耽⁽²²⁹⁾耽⁽²³⁰⁾耽⁽²³¹⁾耽⁽²³²⁾耽⁽²³³⁾耽⁽²³⁴⁾耽⁽²³⁵⁾耽⁽²³⁶⁾耽⁽²³⁷⁾耽⁽²³⁸⁾耽⁽²³⁹⁾耽⁽²⁴⁰⁾耽⁽²⁴¹⁾耽⁽²⁴²⁾耽⁽²⁴³⁾耽⁽²⁴⁴⁾耽⁽²⁴⁵⁾耽⁽²⁴⁶⁾耽⁽²⁴⁷⁾耽⁽²⁴⁸⁾耽⁽²⁴⁹⁾耽⁽²⁵⁰⁾耽⁽²⁵¹⁾耽⁽²⁵²⁾耽⁽²⁵³⁾耽⁽²⁵⁴⁾耽⁽²⁵⁵⁾耽⁽²⁵⁶⁾耽⁽²⁵⁷⁾耽⁽²⁵⁸⁾耽⁽²⁵⁹⁾耽⁽²⁶⁰⁾耽⁽²⁶¹⁾耽⁽²⁶²⁾耽⁽²⁶³⁾耽⁽²⁶⁴⁾耽⁽²⁶⁵⁾耽⁽²⁶⁶⁾耽⁽²⁶⁷⁾耽⁽²⁶⁸⁾耽⁽²⁶⁹⁾耽⁽²⁷⁰⁾耽⁽²⁷¹⁾耽⁽²⁷²⁾耽⁽²⁷³⁾耽⁽²⁷⁴⁾耽⁽²⁷⁵⁾耽⁽²⁷⁶⁾耽⁽²⁷⁷⁾耽⁽²⁷⁸⁾耽⁽²⁷⁹⁾耽⁽²⁸⁰⁾耽⁽²⁸¹⁾耽⁽²⁸²⁾耽⁽²⁸³⁾耽⁽²⁸⁴⁾耽⁽²⁸⁵⁾耽⁽²⁸⁶⁾耽⁽²⁸⁷⁾耽⁽²⁸⁸⁾耽⁽²⁸⁹⁾耽⁽²⁹⁰⁾耽⁽²⁹¹⁾耽⁽²⁹²⁾耽⁽²⁹³⁾耽⁽²⁹⁴⁾耽⁽²⁹⁵⁾耽⁽²⁹⁶⁾耽⁽²⁹⁷⁾耽⁽²⁹⁸⁾耽⁽²⁹⁹⁾耽⁽³⁰⁰⁾耽⁽³⁰¹⁾耽⁽³⁰²⁾耽⁽³⁰³⁾耽⁽³⁰⁴⁾耽⁽³⁰⁵⁾耽⁽³⁰⁶⁾耽⁽³⁰⁷⁾耽⁽³⁰⁸⁾耽⁽³⁰⁹⁾耽⁽³¹⁰⁾耽⁽³¹¹⁾耽⁽³¹²⁾耽⁽³¹³⁾耽⁽³¹⁴⁾耽⁽³¹⁵⁾耽⁽³¹⁶⁾耽⁽³¹⁷⁾耽⁽³¹⁸⁾耽⁽³¹⁹⁾耽⁽³²⁰⁾耽⁽³²¹⁾耽⁽³²²⁾耽⁽³²³⁾耽⁽³²⁴⁾耽⁽³²⁵⁾耽⁽³²⁶⁾耽⁽³²⁷⁾耽⁽³²⁸⁾耽⁽³²⁹⁾耽⁽³³⁰⁾耽⁽³³¹⁾耽⁽³³²⁾耽⁽³³³⁾耽⁽³³⁴⁾耽⁽³³⁵⁾耽⁽³³⁶⁾耽⁽³³⁷⁾耽⁽³³⁸⁾耽⁽³³⁹⁾耽⁽³⁴⁰⁾耽⁽³⁴¹⁾耽⁽³⁴²⁾耽⁽³⁴³⁾耽⁽³⁴⁴⁾耽⁽³⁴⁵⁾耽⁽³⁴⁶⁾耽⁽³⁴⁷⁾耽⁽³⁴⁸⁾耽⁽³⁴⁹⁾耽⁽³⁵⁰⁾耽⁽³⁵¹⁾耽⁽³⁵²⁾耽⁽³⁵³⁾耽⁽³⁵⁴⁾耽⁽³⁵⁵⁾耽⁽³⁵⁶⁾耽⁽³⁵⁷⁾耽⁽³⁵⁸⁾耽⁽³⁵⁹⁾耽⁽³⁶⁰⁾耽⁽³⁶¹⁾耽⁽³⁶²⁾耽⁽³⁶³⁾耽⁽³⁶⁴⁾耽⁽³⁶⁵⁾耽⁽³⁶⁶⁾耽⁽³⁶⁷⁾耽⁽³⁶⁸⁾耽⁽³⁶⁹⁾耽⁽³⁷⁰⁾耽⁽³⁷¹⁾耽⁽³⁷²⁾耽⁽³⁷³⁾耽⁽³⁷⁴⁾耽⁽³⁷⁵⁾耽⁽³⁷⁶⁾耽⁽³⁷⁷⁾耽⁽³⁷⁸⁾耽⁽³⁷⁹⁾耽⁽³⁸⁰⁾耽⁽³⁸¹⁾耽⁽³⁸²⁾耽⁽³⁸³⁾耽⁽³⁸⁴⁾耽⁽³⁸⁵⁾耽⁽³⁸⁶⁾耽⁽³⁸⁷⁾耽⁽³⁸⁸⁾耽⁽³⁸⁹⁾耽⁽³⁹⁰⁾耽⁽³⁹¹⁾耽⁽³⁹²⁾耽⁽³⁹³⁾耽⁽³⁹⁴⁾耽⁽³⁹⁵⁾耽⁽³⁹⁶⁾耽⁽³⁹⁷⁾耽⁽³⁹⁸⁾耽⁽³⁹⁹⁾耽⁽⁴⁰⁰⁾耽⁽⁴⁰¹⁾耽⁽⁴⁰²⁾耽⁽⁴⁰³⁾耽⁽⁴⁰⁴⁾耽⁽⁴⁰⁵⁾耽⁽⁴⁰⁶⁾耽⁽⁴⁰⁷⁾耽⁽⁴⁰⁸⁾耽⁽⁴⁰⁹⁾耽⁽⁴¹⁰⁾耽⁽⁴¹¹⁾耽⁽⁴¹²⁾耽⁽⁴¹³⁾耽⁽⁴¹⁴⁾耽⁽⁴¹⁵⁾耽⁽⁴¹⁶⁾耽⁽⁴¹⁷⁾耽⁽⁴¹⁸⁾耽⁽⁴¹⁹⁾耽⁽⁴²⁰⁾耽⁽⁴²¹⁾耽⁽⁴²²⁾耽⁽⁴²³⁾耽⁽⁴²⁴⁾耽⁽⁴²⁵⁾耽⁽⁴²⁶⁾耽⁽⁴²⁷⁾耽⁽⁴²⁸⁾耽⁽⁴²⁹⁾耽⁽⁴³⁰⁾耽⁽⁴³¹⁾耽⁽⁴³²⁾耽⁽⁴³³⁾耽⁽⁴³⁴⁾耽⁽⁴³⁵⁾耽⁽⁴³⁶⁾耽⁽⁴³⁷⁾耽⁽⁴³⁸⁾耽⁽⁴³⁹⁾耽⁽⁴⁴⁰⁾耽⁽⁴⁴¹⁾耽⁽⁴⁴²⁾耽⁽⁴⁴³⁾耽⁽⁴⁴⁴⁾耽⁽⁴⁴⁵⁾耽⁽⁴⁴⁶⁾耽⁽⁴⁴⁷⁾耽⁽⁴⁴⁸⁾耽⁽⁴⁴⁹⁾耽⁽⁴⁵⁰⁾耽⁽⁴⁵¹⁾耽⁽⁴⁵²⁾耽⁽⁴⁵³⁾耽⁽⁴⁵⁴⁾耽⁽⁴⁵⁵⁾耽⁽⁴⁵⁶⁾耽⁽⁴⁵⁷⁾耽⁽⁴⁵⁸⁾耽⁽⁴⁵⁹⁾耽⁽⁴⁶⁰⁾耽⁽⁴⁶¹⁾耽⁽⁴⁶²⁾耽⁽⁴⁶³⁾耽⁽⁴⁶⁴⁾耽⁽⁴⁶⁵⁾耽⁽⁴⁶⁶⁾耽⁽⁴⁶⁷⁾耽⁽⁴⁶⁸⁾耽⁽⁴⁶⁹⁾耽⁽⁴⁷⁰⁾耽⁽⁴⁷¹⁾耽⁽⁴⁷²⁾耽⁽⁴⁷³⁾耽⁽⁴⁷⁴⁾耽⁽⁴⁷⁵⁾耽⁽⁴⁷⁶⁾耽⁽⁴⁷⁷⁾耽⁽⁴⁷⁸⁾耽⁽⁴⁷⁹⁾耽⁽⁴⁸⁰⁾耽⁽⁴⁸¹⁾耽⁽⁴⁸²⁾耽⁽⁴⁸³⁾耽⁽⁴⁸⁴⁾耽⁽⁴⁸⁵⁾耽⁽⁴⁸⁶⁾耽⁽⁴⁸⁷⁾耽⁽⁴⁸⁸⁾耽⁽⁴⁸⁹⁾耽⁽⁴⁹⁰⁾耽⁽⁴⁹¹⁾耽⁽⁴⁹²⁾耽⁽⁴⁹³⁾耽⁽⁴⁹⁴⁾耽⁽⁴⁹⁵⁾耽⁽⁴⁹⁶⁾耽⁽⁴⁹⁷⁾耽⁽⁴⁹⁸⁾耽⁽⁴⁹⁹⁾耽⁽⁵⁰⁰⁾耽⁽⁵⁰¹⁾耽⁽⁵⁰²⁾耽⁽⁵⁰³⁾耽⁽⁵⁰⁴⁾耽⁽⁵⁰⁵⁾耽⁽⁵⁰⁶⁾耽⁽⁵⁰⁷⁾耽⁽⁵⁰⁸⁾耽⁽⁵⁰⁹⁾耽⁽⁵¹⁰⁾耽⁽⁵¹¹⁾耽⁽⁵¹²⁾耽⁽⁵¹³⁾耽⁽⁵¹⁴⁾耽⁽⁵¹⁵⁾耽⁽⁵¹⁶⁾耽⁽⁵¹⁷⁾耽⁽⁵¹⁸⁾耽⁽⁵¹⁹⁾耽⁽⁵²⁰⁾耽⁽⁵²¹⁾耽⁽⁵²²⁾耽⁽⁵²³⁾耽⁽⁵²⁴⁾耽⁽⁵²⁵⁾耽⁽⁵²⁶⁾耽⁽⁵²⁷⁾耽⁽⁵²⁸⁾耽⁽⁵²⁹⁾耽⁽⁵³⁰⁾耽⁽⁵³¹⁾耽⁽⁵³²⁾耽⁽⁵³³⁾耽⁽⁵³⁴⁾耽⁽⁵³⁵⁾耽⁽⁵³⁶⁾耽⁽⁵³⁷⁾耽⁽⁵³⁸⁾耽⁽⁵³⁹⁾耽⁽⁵⁴⁰⁾耽⁽⁵⁴¹⁾耽⁽⁵⁴²⁾耽⁽⁵⁴³⁾耽⁽⁵⁴⁴⁾耽⁽⁵⁴⁵⁾耽⁽⁵⁴⁶⁾耽⁽⁵⁴⁷⁾耽⁽⁵⁴⁸⁾耽⁽⁵⁴⁹⁾耽⁽⁵⁵⁰⁾耽⁽⁵⁵¹⁾耽⁽⁵⁵²⁾耽⁽⁵⁵³⁾耽⁽⁵⁵⁴⁾耽⁽⁵⁵⁵⁾耽⁽⁵⁵⁶⁾耽⁽⁵⁵⁷⁾耽⁽⁵⁵⁸⁾耽⁽⁵⁵⁹⁾耽⁽⁵⁶⁰⁾耽⁽⁵⁶¹⁾耽⁽⁵⁶²⁾耽⁽⁵⁶³⁾耽⁽⁵⁶⁴⁾耽⁽⁵⁶⁵⁾耽⁽⁵⁶⁶⁾耽⁽⁵⁶⁷⁾耽⁽⁵⁶⁸⁾耽⁽⁵⁶⁹⁾耽⁽⁵⁷⁰⁾耽⁽⁵⁷¹⁾耽⁽⁵⁷²⁾耽⁽⁵⁷³⁾耽⁽⁵⁷⁴⁾耽⁽⁵⁷⁵⁾耽⁽⁵⁷⁶⁾耽⁽⁵⁷⁷⁾耽⁽⁵⁷⁸⁾耽⁽⁵⁷⁹⁾耽⁽⁵⁸⁰⁾耽⁽⁵⁸¹⁾耽⁽⁵⁸²⁾耽⁽⁵⁸³⁾耽⁽⁵⁸⁴⁾耽⁽⁵⁸⁵⁾耽⁽⁵⁸⁶⁾耽⁽⁵⁸⁷⁾耽⁽⁵⁸⁸⁾耽⁽⁵⁸⁹⁾耽⁽⁵⁹⁰⁾耽⁽⁵⁹¹⁾耽⁽⁵⁹²⁾耽⁽⁵⁹³⁾耽⁽⁵⁹⁴⁾耽⁽⁵⁹⁵⁾耽⁽⁵⁹⁶⁾耽⁽⁵⁹⁷⁾耽⁽⁵⁹⁸⁾耽⁽⁵⁹⁹⁾耽⁽⁶⁰⁰⁾耽⁽⁶⁰¹⁾耽⁽⁶⁰²⁾耽⁽⁶⁰³⁾耽⁽⁶⁰⁴⁾耽⁽⁶⁰⁵⁾耽⁽⁶⁰⁶⁾耽⁽⁶⁰⁷⁾耽⁽⁶⁰⁸⁾耽⁽⁶⁰⁹⁾耽⁽⁶¹⁰⁾耽⁽⁶¹¹⁾耽⁽⁶¹²⁾耽⁽⁶¹³⁾耽⁽⁶¹⁴⁾耽⁽⁶¹⁵⁾耽⁽⁶¹⁶⁾耽⁽⁶¹⁷⁾耽⁽⁶¹⁸⁾耽⁽⁶¹⁹⁾耽⁽⁶²⁰⁾耽⁽⁶²¹⁾耽⁽⁶²²⁾耽⁽⁶²³⁾耽⁽⁶²⁴⁾耽⁽⁶²⁵⁾耽⁽⁶²⁶⁾耽⁽⁶²⁷⁾耽⁽⁶²⁸⁾耽⁽⁶²⁹⁾耽⁽⁶³⁰⁾耽⁽⁶³¹⁾耽⁽⁶³²⁾耽⁽⁶³³⁾耽⁽⁶³⁴⁾耽⁽⁶³⁵⁾耽⁽⁶³⁶⁾耽⁽⁶³⁷⁾耽⁽⁶³⁸⁾耽⁽⁶³⁹⁾耽⁽⁶⁴⁰⁾耽⁽⁶⁴¹⁾耽⁽⁶⁴²⁾耽⁽⁶⁴³⁾耽⁽⁶⁴⁴⁾耽⁽⁶⁴⁵⁾耽⁽⁶⁴⁶⁾耽⁽⁶⁴⁷⁾耽⁽⁶⁴⁸⁾耽⁽⁶⁴⁹⁾耽⁽⁶⁵⁰⁾耽⁽⁶⁵¹⁾耽⁽⁶⁵²⁾耽⁽⁶⁵³⁾耽⁽⁶⁵⁴⁾耽⁽⁶⁵⁵⁾耽⁽⁶⁵⁶⁾耽⁽⁶⁵⁷⁾耽⁽⁶⁵⁸⁾耽⁽⁶⁵⁹⁾耽⁽⁶⁶⁰⁾耽⁽⁶⁶¹⁾耽⁽⁶⁶²⁾耽⁽⁶⁶³⁾耽⁽⁶⁶⁴⁾耽⁽⁶⁶⁵⁾耽⁽⁶⁶⁶⁾耽⁽⁶⁶⁷⁾耽⁽⁶⁶⁸⁾耽⁽⁶⁶⁹⁾耽⁽⁶⁷⁰⁾耽⁽⁶⁷¹⁾耽⁽⁶⁷²⁾耽⁽⁶⁷³⁾耽⁽⁶⁷⁴⁾耽⁽⁶⁷⁵⁾耽⁽⁶⁷⁶⁾耽⁽⁶⁷⁷⁾耽⁽⁶⁷⁸⁾耽⁽⁶⁷⁹⁾耽⁽⁶⁸⁰⁾耽⁽⁶⁸¹⁾耽⁽⁶⁸²⁾耽⁽⁶⁸³⁾耽⁽⁶⁸⁴⁾耽⁽⁶⁸⁵⁾耽⁽⁶⁸⁶⁾耽⁽⁶⁸⁷⁾耽⁽⁶⁸⁸⁾耽⁽⁶⁸⁹⁾耽⁽⁶⁹⁰⁾耽⁽⁶⁹¹⁾耽⁽⁶⁹²⁾耽⁽⁶⁹³⁾耽⁽⁶⁹⁴⁾耽⁽⁶⁹⁵⁾耽⁽⁶⁹⁶⁾耽⁽⁶⁹⁷⁾耽⁽⁶⁹⁸⁾耽⁽⁶⁹⁹⁾耽⁽⁷⁰⁰⁾耽⁽⁷⁰¹⁾耽⁽⁷⁰²⁾耽⁽⁷⁰³⁾耽⁽⁷⁰⁴⁾耽⁽⁷⁰⁵⁾耽⁽⁷⁰⁶⁾耽⁽⁷⁰⁷⁾耽⁽⁷⁰⁸⁾耽⁽⁷⁰⁹⁾耽⁽⁷¹⁰⁾耽⁽⁷¹¹⁾耽⁽⁷¹²⁾耽⁽⁷¹³⁾耽⁽⁷¹⁴⁾耽⁽⁷¹⁵⁾耽⁽⁷¹⁶⁾耽⁽⁷¹⁷⁾耽⁽⁷¹⁸⁾耽⁽⁷¹⁹⁾耽⁽⁷²⁰⁾耽⁽⁷²¹⁾耽⁽⁷²²⁾耽⁽⁷²³⁾耽⁽⁷²⁴⁾耽⁽⁷²⁵⁾耽⁽⁷²⁶⁾耽⁽⁷²⁷⁾耽⁽⁷²⁸⁾耽⁽⁷²⁹⁾耽⁽⁷³⁰⁾耽⁽⁷³¹⁾耽⁽⁷³²⁾耽⁽⁷³³⁾耽⁽⁷³⁴⁾耽⁽⁷³⁵⁾耽⁽⁷³⁶⁾耽⁽⁷³⁷⁾耽⁽⁷³⁸⁾耽⁽⁷³⁹⁾耽⁽⁷⁴⁰⁾耽⁽⁷⁴¹⁾耽⁽⁷⁴²⁾耽⁽⁷⁴³⁾耽⁽⁷⁴⁴⁾耽⁽⁷⁴⁵⁾耽⁽⁷⁴⁶⁾耽⁽⁷⁴⁷⁾耽⁽⁷⁴⁸⁾耽⁽⁷⁴⁹⁾耽⁽⁷⁵⁰⁾耽⁽⁷⁵¹⁾耽⁽⁷⁵²⁾耽⁽⁷⁵³⁾耽⁽⁷⁵⁴⁾耽⁽⁷⁵⁵⁾耽⁽⁷⁵⁶⁾耽⁽⁷⁵⁷⁾耽⁽⁷⁵⁸⁾耽⁽⁷⁵⁹⁾耽⁽⁷⁶⁰⁾耽⁽⁷⁶¹⁾耽⁽⁷⁶²⁾耽⁽⁷⁶³⁾耽⁽⁷⁶⁴⁾耽⁽⁷⁶⁵⁾耽⁽⁷⁶⁶⁾耽⁽⁷⁶⁷⁾耽⁽⁷⁶⁸⁾耽⁽⁷⁶⁹⁾耽⁽⁷⁷⁰⁾耽⁽⁷⁷¹⁾耽⁽⁷⁷²⁾耽⁽⁷⁷³⁾耽⁽⁷⁷⁴⁾耽⁽⁷⁷⁵⁾耽⁽⁷⁷⁶⁾耽⁽⁷⁷⁷⁾耽⁽⁷⁷⁸⁾耽⁽⁷⁷⁹⁾耽⁽⁷⁸⁰⁾耽⁽⁷⁸¹⁾耽⁽⁷⁸²⁾耽⁽⁷⁸³⁾耽⁽⁷⁸⁴⁾耽⁽⁷⁸⁵⁾耽⁽⁷⁸⁶⁾耽⁽⁷⁸⁷⁾耽⁽⁷⁸⁸⁾耽⁽⁷⁸⁹⁾耽⁽⁷⁹⁰⁾耽⁽⁷⁹¹⁾耽⁽⁷⁹²⁾耽⁽⁷⁹³⁾耽⁽⁷⁹⁴⁾耽⁽⁷⁹⁵⁾耽⁽⁷⁹⁶⁾耽⁽⁷⁹⁷⁾耽⁽⁷⁹⁸⁾耽⁽⁷⁹⁹⁾耽⁽⁸⁰⁰⁾耽⁽⁸⁰¹⁾耽⁽⁸⁰²⁾耽⁽⁸⁰³⁾耽⁽⁸⁰⁴⁾耽⁽⁸⁰⁵⁾耽⁽⁸⁰⁶⁾耽⁽⁸⁰⁷⁾耽⁽⁸⁰⁸⁾耽⁽⁸⁰⁹⁾耽⁽⁸¹⁰⁾耽⁽⁸¹¹⁾耽⁽⁸¹²⁾耽⁽⁸¹³⁾耽⁽⁸¹⁴⁾耽⁽⁸¹⁵⁾耽⁽⁸¹⁶⁾耽⁽⁸¹⁷⁾耽⁽⁸¹⁸⁾耽⁽⁸¹⁹⁾耽⁽⁸²⁰⁾耽⁽⁸²¹⁾耽⁽⁸²²⁾耽⁽⁸²³⁾耽⁽⁸²⁴⁾耽⁽⁸²⁵⁾耽⁽⁸²⁶⁾耽⁽⁸²⁷⁾耽⁽⁸²⁸⁾耽⁽⁸²⁹⁾耽⁽⁸³⁰⁾耽⁽⁸³¹⁾耽⁽⁸³²⁾耽⁽⁸³³⁾耽⁽⁸³⁴⁾耽⁽⁸³⁵⁾耽⁽⁸³⁶⁾耽⁽⁸³⁷⁾耽⁽⁸³⁸⁾耽⁽⁸³⁹⁾耽⁽⁸⁴⁰⁾耽⁽⁸⁴¹⁾耽⁽⁸⁴²⁾耽⁽⁸⁴³⁾耽⁽⁸⁴⁴⁾耽⁽⁸⁴⁵⁾耽⁽⁸⁴⁶⁾耽⁽⁸⁴⁷⁾耽⁽⁸⁴⁸⁾耽⁽⁸⁴⁹⁾耽⁽⁸⁵⁰⁾耽⁽⁸⁵¹⁾耽⁽⁸⁵²⁾耽⁽⁸⁵³⁾耽⁽⁸⁵⁴⁾耽⁽⁸⁵⁵⁾耽⁽⁸⁵⁶⁾耽⁽⁸⁵⁷⁾耽⁽⁸⁵⁸⁾耽⁽⁸⁵⁹⁾耽⁽⁸⁶⁰⁾耽⁽⁸⁶¹⁾耽⁽⁸⁶²⁾耽⁽⁸⁶³⁾耽⁽⁸⁶⁴⁾耽⁽⁸⁶⁵⁾耽⁽⁸⁶⁶⁾耽⁽⁸⁶⁷⁾耽⁽⁸⁶⁸⁾耽⁽⁸⁶⁹⁾耽⁽⁸⁷⁰⁾耽⁽⁸⁷¹⁾耽⁽⁸⁷²⁾耽⁽⁸⁷³⁾耽⁽⁸⁷⁴⁾耽⁽⁸⁷⁵⁾耽⁽⁸⁷⁶⁾耽⁽⁸⁷⁷⁾耽⁽⁸⁷⁸⁾耽⁽⁸⁷⁹⁾耽⁽⁸⁸⁰⁾耽⁽⁸⁸¹⁾耽⁽⁸⁸²⁾耽⁽⁸⁸³⁾耽⁽⁸⁸⁴⁾耽⁽⁸⁸⁵⁾耽⁽⁸⁸⁶⁾耽⁽⁸⁸⁷⁾耽⁽⁸⁸⁸⁾耽⁽⁸⁸⁹⁾耽⁽⁸⁹⁰⁾耽⁽⁸⁹¹⁾耽⁽⁸⁹²⁾耽⁽⁸⁹³⁾耽⁽⁸⁹⁴⁾耽⁽⁸⁹⁵⁾耽⁽⁸⁹⁶⁾耽⁽⁸⁹⁷⁾耽⁽⁸⁹⁸⁾耽⁽⁸⁹⁹⁾耽⁽⁹⁰⁰⁾耽⁽⁹⁰¹⁾耽⁽⁹⁰²⁾耽⁽⁹⁰³⁾耽⁽⁹⁰⁴⁾耽⁽⁹⁰⁵⁾耽⁽⁹⁰⁶⁾耽⁽⁹⁰⁷⁾耽⁽⁹⁰⁸⁾耽⁽⁹⁰⁹⁾耽⁽⁹¹⁰⁾耽⁽⁹¹¹⁾耽⁽⁹¹²⁾耽⁽⁹¹³⁾耽⁽⁹¹⁴⁾耽⁽⁹¹⁵⁾耽⁽⁹¹⁶⁾耽⁽⁹¹⁷⁾耽⁽⁹¹⁸⁾耽⁽⁹¹⁹⁾耽⁽⁹²⁰⁾耽⁽⁹²¹⁾耽⁽⁹²²⁾耽⁽⁹²³⁾耽⁽⁹²⁴⁾耽⁽⁹²⁵⁾耽⁽⁹²⁶⁾耽⁽⁹²⁷⁾耽⁽⁹²⁸⁾耽⁽⁹²⁹⁾耽⁽⁹³⁰⁾耽⁽⁹³¹⁾耽⁽⁹³²⁾耽⁽⁹³³⁾耽⁽⁹³⁴⁾耽⁽⁹³⁵⁾耽⁽⁹³⁶⁾耽⁽⁹³⁷⁾耽⁽⁹³⁸⁾耽⁽⁹³⁹⁾耽⁽⁹⁴⁰⁾耽⁽⁹⁴¹⁾耽⁽⁹⁴²⁾耽⁽⁹⁴³⁾耽⁽⁹⁴⁴⁾耽⁽⁹⁴⁵⁾耽⁽⁹⁴⁶⁾耽⁽⁹⁴⁷⁾耽⁽⁹⁴⁸⁾耽⁽⁹⁴⁹⁾耽⁽⁹⁵⁰⁾耽⁽⁹⁵¹⁾耽⁽⁹⁵²⁾耽⁽⁹⁵³⁾耽⁽⁹⁵⁴⁾耽⁽⁹⁵⁵⁾耽⁽⁹⁵⁶⁾耽⁽⁹⁵⁷⁾耽⁽⁹⁵⁸⁾耽⁽⁹⁵⁹⁾耽⁽⁹⁶⁰⁾耽⁽⁹⁶¹⁾耽⁽⁹⁶²⁾耽⁽⁹⁶³⁾耽⁽⁹⁶⁴⁾耽⁽⁹⁶⁵⁾耽⁽⁹⁶⁶⁾耽⁽⁹⁶⁷⁾耽⁽⁹⁶⁸⁾耽⁽⁹⁶⁹⁾耽⁽⁹⁷⁰⁾耽⁽⁹⁷¹⁾耽⁽⁹⁷²⁾耽⁽⁹⁷³⁾耽⁽⁹⁷⁴⁾耽⁽⁹⁷⁵⁾耽⁽⁹⁷⁶⁾耽⁽⁹⁷⁷⁾耽⁽⁹⁷⁸⁾耽⁽⁹⁷⁹⁾耽⁽⁹⁸⁰⁾耽⁽⁹⁸¹⁾耽⁽⁹⁸²⁾耽⁽⁹⁸³⁾耽⁽⁹⁸⁴⁾耽⁽⁹⁸⁵⁾耽⁽⁹⁸⁶⁾耽⁽⁹⁸⁷⁾耽⁽⁹⁸⁸⁾耽⁽⁹⁸⁹⁾耽⁽⁹⁹⁰⁾耽⁽⁹⁹¹⁾耽⁽⁹⁹²⁾耽⁽⁹⁹³⁾耽⁽⁹⁹⁴⁾耽⁽⁹⁹⁵⁾耽⁽⁹⁹⁶⁾耽⁽⁹⁹⁷⁾耽⁽⁹⁹⁸⁾耽⁽⁹⁹⁹⁾耽⁽¹⁰⁰⁰⁾耽⁽¹⁰⁰¹⁾耽⁽¹⁰⁰²⁾耽⁽¹⁰⁰³⁾耽⁽¹⁰⁰⁴⁾耽⁽¹⁰⁰⁵⁾耽⁽¹⁰⁰⁶⁾耽⁽¹⁰⁰⁷⁾耽⁽¹⁰⁰⁸⁾耽⁽¹⁰⁰⁹⁾耽⁽¹⁰¹⁰⁾耽⁽¹⁰¹¹⁾耽⁽¹⁰¹²⁾耽⁽¹⁰¹³⁾耽⁽¹⁰¹⁴⁾耽⁽¹⁰¹⁵⁾耽⁽¹⁰¹⁶⁾耽⁽¹⁰¹⁷⁾耽⁽¹⁰¹⁸⁾耽⁽¹⁰¹⁹⁾耽⁽¹⁰²⁰⁾耽⁽¹⁰²¹⁾耽⁽¹⁰²²⁾耽⁽¹⁰²³⁾耽⁽¹⁰²⁴⁾耽⁽¹⁰²⁵⁾耽⁽¹⁰²⁶⁾耽⁽¹⁰²⁷⁾耽⁽¹⁰²⁸⁾耽⁽¹⁰²⁹⁾耽⁽¹⁰³⁰⁾耽⁽¹⁰³¹⁾耽⁽¹⁰³²⁾耽⁽¹⁰³³⁾耽⁽¹⁰³⁴⁾耽⁽¹⁰³⁵⁾耽⁽¹⁰³⁶⁾耽⁽¹⁰³⁷⁾耽⁽¹⁰³⁸⁾耽⁽¹⁰³⁹⁾耽⁽¹⁰⁴⁰⁾耽⁽¹⁰⁴¹⁾耽⁽¹⁰⁴²⁾耽⁽¹⁰⁴³⁾耽⁽¹⁰⁴⁴⁾耽⁽¹⁰⁴⁵⁾耽⁽¹⁰⁴⁶⁾耽⁽¹⁰⁴⁷⁾耽⁽¹⁰⁴⁸⁾耽⁽¹⁰⁴⁹⁾耽⁽¹⁰⁵⁰⁾耽⁽¹⁰⁵¹⁾耽⁽¹⁰⁵²⁾耽⁽¹⁰⁵³⁾耽⁽¹⁰⁵⁴⁾耽⁽¹⁰⁵⁵⁾耽⁽¹⁰⁵⁶⁾耽⁽¹⁰⁵⁷⁾耽⁽¹⁰⁵⁸⁾耽⁽¹⁰⁵⁹⁾耽⁽¹⁰⁶⁰⁾耽⁽¹⁰⁶¹⁾耽⁽¹⁰⁶²⁾耽⁽¹⁰⁶³⁾耽⁽¹⁰⁶⁴⁾耽⁽¹⁰⁶⁵⁾耽⁽¹⁰⁶⁶⁾耽⁽¹⁰⁶⁷⁾耽⁽¹⁰⁶⁸⁾耽⁽¹⁰⁶⁹⁾耽⁽¹⁰⁷⁰⁾耽⁽¹⁰⁷¹⁾耽⁽¹⁰⁷²⁾耽⁽¹⁰⁷³⁾耽⁽¹⁰⁷⁴⁾耽⁽¹⁰⁷⁵⁾耽⁽¹⁰⁷⁶⁾耽⁽¹⁰⁷⁷⁾耽⁽¹⁰⁷⁸⁾耽⁽¹⁰⁷⁹⁾耽⁽¹⁰⁸⁰⁾耽⁽¹⁰⁸¹⁾耽⁽¹⁰⁸²⁾耽⁽¹⁰⁸³⁾耽⁽¹⁰⁸⁴⁾耽⁽¹⁰⁸⁵⁾耽⁽¹⁰⁸⁶⁾耽⁽¹⁰⁸⁷⁾耽⁽¹⁰⁸⁸⁾耽⁽¹⁰⁸⁹⁾耽⁽¹⁰⁹⁰⁾耽⁽¹⁰⁹¹⁾耽⁽¹⁰⁹²⁾耽⁽¹⁰⁹³⁾耽⁽¹⁰⁹⁴⁾耽⁽¹⁰⁹⁵⁾耽⁽¹⁰⁹⁶⁾耽⁽¹⁰⁹⁷⁾耽⁽¹⁰⁹⁸⁾耽⁽¹⁰⁹⁹⁾耽⁽¹¹⁰⁰⁾耽⁽¹¹⁰¹⁾耽⁽¹¹⁰²⁾耽⁽¹¹⁰³⁾耽⁽¹¹⁰⁴⁾耽⁽¹¹⁰⁵⁾耽⁽¹¹⁰⁶⁾耽⁽¹¹⁰⁷⁾耽⁽¹¹⁰⁸⁾耽⁽¹¹⁰⁹⁾耽⁽¹¹¹⁰⁾耽⁽¹¹¹¹⁾耽⁽¹¹¹²⁾耽⁽¹¹¹³⁾耽⁽¹¹¹⁴⁾耽⁽¹¹¹⁵⁾耽⁽¹¹¹⁶⁾耽⁽¹¹¹⁷⁾耽⁽¹¹¹⁸⁾耽⁽¹¹¹⁹⁾耽⁽¹¹²⁰⁾耽⁽¹¹²¹⁾耽⁽¹¹²²⁾耽⁽¹¹²³⁾耽⁽¹¹²⁴⁾耽⁽¹¹²⁵⁾耽⁽¹¹²⁶⁾耽⁽¹¹²⁷⁾耽⁽¹¹²⁸⁾耽⁽¹¹²⁹⁾耽⁽¹¹³⁰⁾耽⁽¹¹³¹⁾耽⁽¹¹³²⁾耽⁽¹¹³³⁾耽⁽¹¹³⁴⁾耽⁽¹¹³⁵⁾耽⁽¹¹³⁶⁾耽⁽¹¹³⁷⁾耽⁽¹¹³⁸⁾耽⁽¹¹³⁹⁾耽⁽¹¹⁴⁰⁾耽⁽¹¹⁴¹⁾耽⁽¹¹⁴²⁾耽⁽¹¹⁴³⁾耽⁽¹¹⁴⁴⁾耽⁽¹¹⁴⁵⁾耽⁽¹¹⁴⁶⁾耽⁽¹¹⁴⁷⁾耽⁽¹¹⁴⁸⁾耽⁽¹¹⁴⁹⁾耽⁽¹¹⁵⁰⁾耽⁽¹¹⁵¹⁾耽⁽¹¹⁵²⁾耽⁽¹¹⁵³⁾耽⁽¹¹⁵⁴⁾耽⁽¹¹⁵⁵⁾耽⁽¹¹⁵⁶⁾耽⁽¹¹⁵⁷⁾耽⁽¹¹⁵⁸⁾耽⁽¹¹⁵⁹⁾耽⁽¹¹⁶⁰⁾耽⁽¹¹⁶¹⁾耽⁽¹¹⁶²⁾耽⁽¹¹⁶³⁾耽⁽¹¹⁶⁴⁾耽⁽¹¹⁶⁵⁾耽⁽¹¹⁶⁶⁾耽⁽¹¹⁶⁷⁾耽⁽¹¹⁶⁸⁾耽⁽¹¹⁶⁹⁾耽⁽¹¹⁷⁰⁾耽⁽¹¹⁷¹⁾耽⁽¹¹⁷²⁾耽⁽¹¹⁷³⁾耽⁽¹¹⁷⁴⁾耽⁽¹¹⁷⁵⁾耽⁽¹¹⁷⁶⁾耽⁽¹¹⁷⁷⁾耽⁽¹¹⁷⁸⁾耽⁽¹¹⁷⁹⁾耽⁽¹¹⁸⁰⁾耽⁽¹¹⁸¹⁾耽⁽¹¹⁸²⁾耽⁽¹¹⁸³⁾耽⁽¹¹⁸⁴⁾耽⁽¹¹⁸⁵⁾耽⁽¹¹⁸⁶⁾耽⁽¹¹⁸⁷⁾耽⁽¹¹⁸⁸⁾耽⁽¹¹⁸⁹⁾耽⁽¹¹⁹⁰⁾耽⁽¹¹⁹¹⁾耽⁽¹¹⁹²⁾耽⁽¹¹⁹³⁾耽⁽¹¹⁹⁴⁾耽⁽¹¹⁹⁵⁾耽⁽¹¹⁹⁶⁾耽⁽¹¹⁹⁷⁾耽⁽¹¹⁹⁸⁾耽⁽¹¹⁹⁹⁾耽⁽¹²⁰⁰

授がいなくてはならぬ》という構想は若干の紆余曲折を経てついに実現化の最終局面を迎えていたのであった。1754年3月16日、以下のような内容のインティエーリからの請願に対して勅許が下った。(1) 王立ナポリ大学に「商業と機械学」の講座を新設する。基金としてインティエーリは75,000ドゥカート⁽²⁵⁾を寄贈し、年利300ドゥカートを教授の給与に充てる。(2) 初代教授にはアントニオ・ジェノヴェージを任命する。以後は公募とする。但し、特定の修道会派に属する者は就任できない。(3) 講義はイタリア語で行う⁽²⁶⁾。これによって、1754年11月5日、イタリアで最初の、そしてヨーロッパでも2番目の「経済学」講座の開講の辞が述べられる。

この開講の辞の内容そのものは伝わっていない。というも、ジェノヴェージはそのために特別に準備をすることなく、感興の赴くままに話ただけだからであるが、この開講の辞はまもなく街中の噂となり、大勢の人々が原稿を写させてくれといってくるので、《商

業についての概説 *Discorso generale sul commercio* を刊行すると便利だろうと考えている》と友人宛の書簡で報告している。こうした構想がやがて結実して、以下においてその内容を検討する「商業汎論」*Ragionamento sul commercio in universale* の成立をみるわけである。

II

ジェノヴェージは「商業汎論」の冒頭で先ず経験科学の実践的性格を主張する。

《人類の歴史が我々に教えるところでは、様々な技術や科学一即ち、実践的な事物の体系や純粋な認識の体系が生じる以前に、先ず、利益なり知識なりを欲した人々の個別的な経験や試行があった。つまり、技術や科学としての幾何学や医学や天文学の成立には、幾何学的・医学的・天文学的な個々の経験が先行していたのである。と言う

注(25) *Ragionamento sopra i mezzi più necessari per far rifiorire l'agricoltura del P. Abate D. Ubaldo Montelatici della congregazione lateranese, colla relazione dell'erba orobanche detta volgarmente Succiamela e del modo di estirparla del celebre Pier-Antonio Micheli, con un discorso di Antonio Genovese, regio Professore d'Etica, Sopra il vero fine delle Lettere e delle Scienze. Il tutto dedicato al Signor D. Bartolommeo Intieri, Naooli, Simone, 1753* (扉には1753年刊とあるが、実際に出版されたのは1754年前半である。なお、フィレンツェでの初版刊行は1752年である。原著者モンテラティエーリについては、Franco VENTURI, *Settecento riformatore*, op. cit., vol. I, pp. 334-37を参照)。ジェノヴェージは後年にもトスカーナの農学書をナポリで再版して「イングランドの新農法」に関する解説を付加している。L'agricoltore sperimentato di Cosimo Trinci, con alcune giunte dell' abate Antonio Genovesi, Napoli, stamp. Simoniana, 1764 がそれである。

(26) 例えば、ジェノヴェージは、活版印刷術の発明、またF. ベーコン並びにガリレオの出現によってもたらされたヨーロッパ諸国の《哲学の復興》を称賛した後、ナポリ王国の状態を省みて次のように訴えかける。《理性が心や手の裡に座を持たず、依然としてまだ抽象的な知性の裡に留まっているならば、理性は或る国民においてその成熟に達したとは言えない。理性は常に良きものであるというのは真実である。しかし、理性が実践的 *operatrice* でないならば、それはまだ未熟である。それはお望みとあらば人々を飾り立てることはできよう。だが、人々にとって有用であることはできない。それはちょうど宝石のようなものである。輝きはする。しかし養分は与えない。理性は実践や現実とならぬときには有用ではない。また、それは、習慣や諸技芸のうちにすっかり普まって、私達がそれを殆どそうと意識せぬままに私達の最高の規範として用いるようにならぬうちは、実践的・現実的にはならぬのである。ところで、私達の間では、諸学問はこうした兆候を現すにまで至っているだろうか。私達は相変わらず実践よりも議論を好んでいるのではないか》(SE. p. 24)。

(27) 特に SE. pp. 47-50 を参照。こうした主張は後の著作でも随所で繰返される(例えば、農業を論じた『グレート・ブリテン商業史』第1巻評注8 [SE. pp. 302-5])。実際にジェノヴェージの呼び掛けに応える活動が各地で開始されるようになった。その代表的な事例として、Terlizzi の Ferrante Maddalena DE GEMMIS (1732-1803) の活動が挙げられる。その様子は、ジェノヴェージが彼に書き送った書簡(Lettere familiari [Ed. SAVARESE])には9通収録されている等から窺うことができる。

(28) この間の経緯についてはジェノヴェージの「自伝」の当該箇所(RN. pp. 74-76)が伝えているほか、Lucio VILLARI, op. cit., pp. 31-34 でも文書館史料を用いて詳述されている。因に、ナポリ大学の講義がイタリア語で行われたのはこの講座が最初であり、これに対する賛否両論が騒然として湧き起こり、次注に挙げる書簡中のジェノヴェージの表現するところでは、さながら《内乱》の如き様相を呈したという。

のも、技術や科学は順序立ち互いに調和する多数の規則の連鎖のことであり、初めに経験や観察によって生みだされた個別的な規則があって、しかる後にそれらの調和的な連鎖があるわけである》⁽³⁰⁾

「商業」commercioや「経済」economiaもまたこうした「技術や科学」の一つであり、そこでは「経験や観察」は諸国民の「歴史」へと拡大される。

《そこで、他の、こうした経験を十分に持たないか、または、こうした経験から経済の学を作りだ

すことができなかった国民がこの学を身に付けるには、より実践的で熟達した国民が我々に示している商業の諸学説を読むだけで全く十分なように思われるかも知れない。だが、ある技術を完全に習得しようと望む者たちにとって、一般的な諸規則とそれら諸規則の相互の関連をただ単に知ることと、そこから更にすすんでそうした諸規則が生じた原因や理由を理解することとは別のことである。なぜなら、要約的にしめされてしまった

注 (29) Lettera a Giuseppe DE SANCTIS, 23 novembre 1754, Lettere familiari, Ed. SAVARESE pp. 89-90. 但し、ジェノヴェージはこれより3箇月余り前(3 agosto 1754)の同人宛の書簡でも《今年の講義の最初には商業の理論の入門に役立つ Discorso を与えて、我々が勤勉なる若者達にこうした学問を賞味させてみたい》(Ed. SAVARESE p. 89)と述べている。とはいえ、11月23日付けの書簡でジェノヴェージが伝えるところでは、彼の講義には立錫の余地がないほどに聴講者がつめかけたが、大部分は一般市民であり、肝心の学生達はいえ、登録したのは100人ばかりで、《若者達はまだこうした主題の有用性を充分に理解していなくて、ユスティニアヌスやガレヌスが引用されぬのはあまり気に召さない》というありさまであった。《だが、勇気をもって前進せねばなりません。こうした氷山を打ち砕かねばなりません》と、ジェノヴェージは覚悟の程を語っている。他方では、しかし、善き前兆も現れてきていた。《この講義から市中には大きな動きが生じました。あらゆる階層の人々が経済や商業や技芸や農業の書物を求めています。これは幸先の善いことです》—「商業汎論」の成立の背後には、こうした人々の需要に応えようという動機が大きく働いていたと考えられる。実際、「商業汎論」を含む『グレート・ブリテン商業史』の全体は、英仏の経済学文献への案内書的な性格を備えているわけであるが、本稿が次節以下で問題とするのは、まさにジェノヴェージ自身がそれらの文献を主体的にどのように読みとったかという点である。

(30) SE. p. 119. ジェノヴェージは、「叙説」においても、冒頭で先ず「理性」を《普遍的な技術》arte universaleと呼んで万人に備わったものとして捉え、その発展にとっての「経験」の重要性を説いていた。従って、原始状態の人類に関しても、ジェノヴェージは、《原初の人々の思念はただ生活の維持ということにだけ向けられていたのであるから、空虚で現実離れした観念の単なる思弁に費やされる結構な怠惰などという代物はめったになかった。人間理性の最初の学校は、最も必要とされる諸技術の学校に他ならず、そこでは最も年長で経験に富む者達が広大な自然の訓練場で若者達を教育したであろう》(SE. p. 13)と想像する。このような状態から人類を飛躍的に進歩させたのが、彼によれば「文字」lettereの発明であり、これによって人類は空間や時間の隔たりを超えて互いの意志や経験を伝達できるようになった。だが、それは同時に「学問」lettereそれ自体の変質の原因ともなった。学問の中心地が農村から都市へと移動するやいなや《私達の眼前にある実物よりも、その模写の方をより熱心に研究することが始まった》(ibid.)からである。かくして、《人類中の雄蜂の如く、それが単純な者達には一つの職業と見えるのをよいことにして、他人を欺いて怠惰に暮らすことを好む》徒輩が世界中に雑草のようにはびこった結果、《人類の利益を目指すべきであった理性の学校はこうした類の怠惰な学生達で一杯になり、本来その正当な所有者であるべき農民や牧人や職人達は汚れた庶民としてそこから締めだされてしまった》(SE. p. 14)。とはいえ、ジェノヴェージも古典古代のポリス社会の意義を全面的に否定しているわけではない。《諸国民の最初のそして最古の哲学は、倫理・経済・政治の哲学に他ならなかった。最初の哲学者達は同時にまた国民の立法者・父・伝導者・僧侶でもあった。彼らの哲学は全く事物に即して、その生活は社会の便宜のために参画し、公共の善、また家政の善のための配慮や労働に携わろうとする市民の生活であった》(SE. pp. 14-15)。しかし、かかる市民的な「徳と智」も永くは続かなかった。《怠惰は高貴で名誉ある職業である》という《時代の標語》が《疫病のように》蔓延してしまっただからである。ジェノヴェージは、ソクラテスをさえもその「怠惰」の礼賛ゆえに弾劾し、それ以降の哲学者達は全て《怠惰を神聖化して…酔漢の如く…理性の人形と戯れて…難解めいた事柄をあげつらい…誰が無益な空想や思弁においてより勇敢であるかを競い合った》だけだと激しく論難する(SE. pp. 16-19)。このような歴史意識を背景として、ジェノヴェージは、近代科学の経験主義こそが人類の最古の、そしてまた本来の「理性」(＝知識)のあり方をより高度の段階で再現するものだと考えているわけである。尚、かかるジェノヴェージの「怠惰」批判を、当時においては学問の現状への批判という形でしか表明できなかった、《支配階級のイデオロギーの隅の首石》への対決の意志表示であったとし、これを反封建制論争の系譜に位置付けようとする解釈が、Rosario VILLARI, "Antonio Genovesi e la ricerca delle forze motorie dello sviluppo sociale", in: Id., Ribelli e riformatori dal XVI al XVIII secolo, Roma, Riuniti, 1979によって提出されている。

技術というものは無味乾燥なものだが、そうした技術が生じた原因の分析は豊かな内容に満ちていて、習得さるべき事物に関するいかなる疑問の余地も残さないからである。それ故、ある一国民の間で商業の科学を植え付け定着させようと欲するならば、この科学を大いに実践し展開させている諸国民の商業の歴史を示す以上に有益なことはない。そういう次第でフランス人達は賢明な諸国民が書き著した商業に関するあらゆる書物を、とりわけ経済や商業も含む諸技術の起源・発達・完成を扱っているものを自分達の言語に翻訳するようになったのである》

ジェノヴェージもまたこのような姿勢に倣おうというのである。しかし彼はここで一つの誤解を解いておかねばならなかった。《我々のこの商業の講座のことを聞いた人々の多くは、こうした科学の教授とは商人に商売の術をおしえるものと単純に思い込んでしまった》⁽³¹⁾からである。そこで彼は「商業の政治科学」*scienza politica del commercio* は「国民」*nazione* 全体に関わるものであり、私的な利益だけを目的とする「商売の実践」*pratica della mercatura* とは峻別さ

るべきことを強調している。「商業の学」・「商業」の政治科学・あるいはまた「経済科学」*scienza economica* と呼称は様々であるが、いずれにせよその対象が「政治経済」*economia politica* である点に変わりはない。

この「政治経済」の目的としてジェノヴェージは「人口」*popolazione* と「便宜・富裕・勢力」*comodi・ricchezza・potenza* の2つを挙げる。従ってまた、「商業の学」の課題も、《国家が最大限可能な数の市民を有すること》と《その市民達が可能な限り安楽に暮らせ、最大限可能な富裕と勢力を得るようにさせること》⁽³²⁾である。

ここで重要なのは、ジェノヴェージが上の2つの課題は密接に関連しあっていて分ち難いと繰り返し強調している点である。つまり、これはジェノヴェージが単純に、人口は多ければ多いほどよい、と考えていたわけではないことを示している。確かに彼は「政治経済の第1の、そして主要な目的」として先ず「人口の増加」をとりあげ、そのための「諸手段」を論じている。そこでは人口増加の原因として以下の10項目が掲げられる。1. 肥沃な土地。2. 健康的な気候と風

注 (31) SE. p.119-20. ジェノヴェージが同時代のフランスでヴァンサン・ドゥ・グルネを中心に展開された経済学文献の翻訳・著述活動にいかにも多くを負っているかは、前掲の『三田経済学研究』の拙訳の解題・訳注を参照されたい。前稿では紙幅の関係で割愛したが、ジェノヴェージの書簡の以下の一節は仏伊の経済学の交流史の興味深い一齣を伝えていると思われるのでここで紹介しておきたい。《……それから最近私はフランス王の国庫役人であり、あの有名な書物『商業とその他の国力の源泉にかんするフランスとグレート・ブリテンの利点と不利点の考察』の著者である紳士ダンジュール氏と非常にうちとけた会話を交わしました。私は彼の著書をケアリーへの注のなかで引用し、しかるべく賞賛しました。彼は私に感謝していました。36才の、とても才気のある人物で、たいへん知見があり、ヨーロッパ中を旅してきました。真の愛国者でありながら、フランスの偏見に染まっていません。これは私には全く奇跡のようです。明日もういちど彼を家で待ちます。というのも、彼は月曜日〔22日?〕に旅立つからです。彼は私の評注をとてよく読んでいて、私とすっかり同意見だと丁重に礼を述べてくれました。そのほかに彼が私に言うには、ストックホルムにやはり最近設けられた商業の講座があること〔1741年9月16日 Anders BERCH (1711-1771) がウプサラ大学の「法律・経済・商業」*iurisprudentiae, economiae et commerciorum* の教授に任命された〕、こうした講座は全ヨーロッパでこれと我々のとしかなく、とのことです。……》(Lettera a Giuseppe DE SANCTIS, 20 agosto 1758, Lettera familiari, Ed. SAVARESE, p.117)。なお、18世紀フランスの経済思想ならびに当時の英仏経済学の交流史に関しては、慶応義塾大学大学院経済学研究科における1984年度の経済学史特殊講義等を通じて、一橋大学の津田内匠教授からたいへん有益かつ刺激的な御教示を頂いたことを記して感謝の言葉を申し述べる次第である。

(32) SE. p.126.

(33) SE. p.127. こうした表現から直ちにジェノヴェージを時代遅れの重商主義の亜流と即断されぬよう希望する。《ジェノヴェージは重商主義的な信条に従ってその探究を開始する。しかし、君主とその臣民全体の幸福として含意された諸国民の勢力と富裕の概念は、すぐに生産力の諸原因の分析によって乗り越えられ、置き換えられる。生産が個人の能力を基盤として組織されていることが看取されるやいなや、この個人こそが経済学的議論の重要な前提として分析されることが求められる。ジェノヴェージは、彼が心に抱いていた革新に相応しい新たな人間像、過去2世紀間のヨーロッパ史の主役に類似した新たな人間像を探究するのである》(Eluggero PII, op. cit., p.20)。この言葉は最近のジェノヴェージ研究の主題とするところをよく示している。直接にはジェノヴェージの後半生の全行程について述べられたものであるが、「商業汎論」に即してもこうした見解はほぼ首肯されるであろう。

土。3. 農業。4. 製造業。5. 商業。6. 漁業と海運。7. 結婚の奨励。8. 法の厳格な遵守（法の前の平等）。9. 市民的（文明的）統治 *governo civile* の賢明さと温和さ。10. 正しく行きとどいた教育（道徳による慣習の健全化）。このうち、地理的要因（1と2）はさほど重きを置かれてはいない。ジェノヴェージは最後の「教育」をとりわけ重視して、劣悪な自然環境もこれによって克服しうるものだとして力説する。この教育の内容は、戦争や殺人といった野蛮な習慣を改めるということであって、そのためには法をいかに厳格に執行してみたところで無効で、文化程度の向上こそが求められるという主張である。その限りでは、これも他の社会的・制度的要因（7～9）と同様に、人口増大にたいしてはその阻害要因を除去するという消極的・間接的な意味しか与えられていないように見える。積極的・直接的に作用するのは経済的要因（3～6）であろう。ここでジェノヴェージは、これらの部門が生活資料のみならず「就業」*occupazione* の機会を提供することによって人口増大に寄与する点に着目している。例えば「商業」の場合であれば、これが人口増大の原因となるのは、《第1に、他には生活の方法を見い出せないような多くの人々を就業させるからであり、次に、食料や製造品の流通を促進することによって、その分それらの消費を増大させるからである。そしてこれは農業や諸技芸に新たな刺激を与え、これによって人々の生活を維持するための資料や就業の機会が生じ・増大し、このようにして無数の家族が暮らせるようになる》⁽³⁴⁾ からだという。このように人口が富裕の進歩と均衡しつつ発展していく状態をジェノヴェージは理想としていたわけである。そしてこのことは逆に富裕の進歩の側からいえば、後

で見るように、「人口」が「生産力＝分業」の問題として端緒的に把握されたことを意味していた。

さて、「政治経済」の第2の目的は便宜・富裕・勢力の増大であった。ジェノヴェージはここで農業・製造業・商業の順に叙述を進める。最後の商業の部分は更に「国内商業」*commercio interno* と「外国貿易」*commercio estero* に分けられて、それぞれの原則がまとめられている。この叙述の順序は同時にまた彼がどのように「国民経済」の展開を捉えていたかを物語っている。

「便宜と富裕の第1の源泉」は農業である。ジェノヴェージはここで農業に関する《幾つかの定理 *teorema* と問題》を提起している。彼は次のような「公理」*axioma* から出発する。《国民の、従ってまた、その君主の、富裕と勢力は、その国土の広さと肥沃さ、その人口、その労働の総量に⁽³⁷⁾ 応じて定まる》。「労働の総量」*somma dei fatighe* という言葉は直ちに「住民の勤労」*industria degli abitanti* とも言い換えられている⁽³⁸⁾。ジェノヴェージはスペインを例にとって説明する。スペイン本国の国土の面積は一定であったが、その人口の増減につれて富裕と勢力も盛衰を経てきている。現時のスペインは800万の人口を数えるに過ぎないが、もしその勤労がふるに発揮されたならば2,400万を扶養できるはずだというのである。《人口と労働がともに増大すれば、何よりも土地が、あるいは土地の肥沃度が増大するであろう（これは次に述べたようにすれば、新たな帝国を獲得しなくとも可能なことである）。それに⁽³⁹⁾ 応じて富裕と勢力も増大するであろう》。そして実際に彼は続けて、開墾と干拓・施肥による土地の肥沃化・害虫駆除等の農業の技術的改良を推奨するのである⁽⁴⁰⁾。

注 (34) SE. pp. 128-31.

(35) SE. p. 128.

(36) ジェノヴェージは、「学問と科学の真の目的についての叙説」でも、《国民の富裕と偉大さの原因》の一つに「人口」を挙げているが、そこでは次のような興味深い指摘を行っている。《逆説的なように思われるかも知れないが、人間とは、他の人間と一緒になったとき、その総計に等しいというよりも、いうなればその自乗に相当する力を発揮する力能である、というのは真実である。同類との交際が生みだすところの競争・名誉・快活・愛情・慈悲が、そして付け加えるならば、人間が他の人間と共にいるときのみ感じる野心・羨望・怒り・憤りといったあらゆる情念が、行動を増大・加速させる非常な発条となり、1人では100日かかってもなしえぬようなことでも、10人ならたった1日でできるようにさせるのである》(SE. pp. 31-32)。

(37) SE. p. 134. なお、「人口」と「生産的労働」を論じた『グレート・ブリテン商業史』第1巻評注24でも、最初に《……国の勢力と富裕は、それを構成する人間の数から生じるのではない。働き手 *braccie lavoratrici* の量から生じるのである》(SE. p. 364) と述べられている。

(38) ジェノヴェージは、「叙説」でも、《国民の富裕と偉大さの原因》のうち最も決定的な要因として《住民の勤労》を論じている (SE. pp. 32-50.)。

(39) SE. p. 134.

ジェノヴェージは、だが、農業の振興を単に技術的問題としてのみ捉えていたわけではない。その原動力となるべき勤勞の發揮自体を阻害する社会経済的要因の存在も同時に指摘している。まず何よりも《土地の過度に不均等な分配は国民の富裕を減少させる》。その理由は以下のように説明される。

《1万モッジョ〔面積単位、通常は1moggio≒0.337ha.但し地域によりかなり異なる〕の土地がたった1家族だけに所有されている場合と、5千家族によって所有されている場合とを考えてみよう。後者の1万モッジョの方が前者より遙かに良く耕作されるであろうことは自ずと明らかである。何故なら、第1に、誰もが他人の土地よりも自分の土地の方を良く耕すからであり、第2に、広大な土地の所有者は土地が大きくなるほど、その土地に対する配慮に乏しくなり、熱心でなくなるからであり、第3に、土地が大きくなると、そのかなりの部分が、狩猟場や馬場や——フランス風と言うところの——「花壇」parteri等々といった娯楽的な用途に充てられるのが常だからである。従ってこうした非常に不均等な土地の分配は耕地の面積と勤勞の総量とを減じ、それによって国家の諸便宜と富裕を小さくする。こうした事情は古

代の諸共和国にはよく理解されていたのであり、かかる政治的疾患を癒すのに必要不可欠な法律である農業法によって償われたのである》

さらにまた、《地租の不平等は国民の富裕を減少させる原因である》。この点は農産物価格への影響と関連させて論じられている。

《例えば、ある者はその土地からの収入の10分の1を支払っているのに、他の者は5分の1、すなわち半分も余計に支払っているとしよう。10分の1を支払う前者はその農産物を後者より10分の1ほど安く売ることができるであろう。従って、前者は後者より選好される(優位にたつ)であろう。この選好は後者を意気阻喪させ、その結果、彼はできることをも差し控えるようになる。すると勤勞の総量は可能な限り最大のものとならないだろう。これは国民の収入と富裕を減少させていってしまう。このような次第であるから、経済著述家達はみな、よく整備された国家においてはいかなる(免税)特権 immunità delle terre・privilegi・franchigia もあってはならない、と言っているのである》

これら2つの引用文から、ジェノヴェージがどのような農業の形態を理念として抱懐していたかが推察さ

注(40) 英仏の重商主義文献が盛んに問題としていながら、ジェノヴェージの『政治経済学』には殆ど欠落しているのが、「植民地」論である。当時のナポリ王国にとっては関わりのない主題であったことがその決定的な理由であろうが、ジェノヴェージ自身は、『グレート・ブリテン商業史』第2巻に付した「巨富の力と効果についての哲学的論考」(特に、SE. p. 520を見よ)や英領北米植民地に言及した第3巻評注9(SE. pp. 832-33)等で、植民地との交易は奢侈や過剰な貨幣蓄積をもたらすだけで本国にとってはむしろ有害なこと、のみならず、植民地はやがて経済的・軍事的にも本国を凌駕してヨーロッパ全体の脅威となるであろうと警告している。

(41) SE. pp. 135-37. 『グレート・ブリテン商業史』第1巻の評注は、農業及び牧畜の技術改良に関して、かなりの頁数をあてて論じている。主なものでは、農業全般を論じた評注8以外にも、10(牛の飼育)・11(羊の飼育)・13(馬やその他の家畜の飼育)・16(タル農法の紹介)等がある。

(42) SE. pp. 137-38. 同様の主張は7年後にトリンチの『経験を積んだ農業者』(前出、注25参照)のナポリ版刊行に際してジェノヴェージが付けた「序文」Prefazioneでも展開されている。《自分の土地を耕作すると、他人の土地で働くのとではどんなに大きく相違するかは、あまりに自明のことである。……自分の土地をもつ農民達は、常に賢明であり、分別に富み、勤勉である。単に現在の利益を考えるだけでなく、将来にまで考えを巡らせる。その結果、自分達の耕作を改善し、永續させるべく工夫するのである。こうしたことは、他人の土地で労苦する者達の間には起こらない》(SE. p. 881)。ジェノヴェージによれば、18世紀初頭の段階でナポリ王国の耕地の2/3は教会関係の、残りのさらに2/3は《紳士・貴族・そして若干の外国人達》の所有であり、自営農民に属するのは、僅かに1/9であるという(ibid.)。この数値をそのまま鵜呑みにすることはできないが、ジェノヴェージの「反教権的」anticurialeな姿勢は明瞭である。それでは、何をなすべきか? ジェノヴェージは、「農民法」の施行の如き急激な変革は、《公共の安寧》を危殆に瀕せしめるがゆえに、自分の採るところではないという。彼が《唯一の救済策》として提起したのは、トリンチも奨めているように《土地を永代小作化すること livellare, o censuare in perpetuo i fondi》である(SE. pp. 882-83)。少なくとも農民の安定した土地保有を実現することが、ジェノヴェージの当面の課題であったと考えられる。

(43) SE. p. 137.

れよう。すなわち、前の文章では、粗放的な大農経営から集約的かつ「独立自営農民」的な経営への転換の重要性が語られている。それが当然のことながら「商品生産」を前提としていることは後の文章から確認される。そして、当時の南イタリアの現実と照らし合わせるならば、ジェノヴェージはここでおそらく果樹栽培（オリーブ・葡萄・柑橘類など）や桑・棉花・麻等の商品作物生産を念頭に置いていたに相違ない。⁽⁴⁴⁾ 実際、彼が例示している $1万/5千 = 2$ モッジョ という数値は、穀作を問題とするのであればあまりに不適切な例としか言いようがない。1 モッジョ（あるいはトーモロとも呼ばれることもある）とは元来 1 トーモロ（1 tomolo = 0.555hl.）の小麦を播種するのに要する面積単位であ

る。当時の小麦の播取比は一般に 1 対 4 乃至 5、先進地域でも 1 対 8 程度であった。一方、一人当たりの小麦の年間消費量は 4～5 トーモロであり、また、翌年の種も保存しておかねばならないから、穀作だけに依存している限り、2 モッジョの畑ではいかに勤勉な農民でも 4・5 人の家族分の自給すら覚束ない筈である。ところが、商品作物一とりわけ南イタリアの主要産品であるオリーブ油は、北ヨーロッパ諸国からの需要の増大によって、18世紀中葉以降、価格は高騰し輸出量も急激に増加している。そして、18世紀後半においては 1～2 モッジョ程度の規模の果樹園が盛んに売買され、そこには多数の農民が購入者として加わっていた事例も報告されているのである。^(44') もとより、かかる事

注（44）ジェノヴェージは『グレート・ブリテン商業史』第1巻評注22でヴォーバンにならってナポリ王国の人口扶養力の可能値を試算する際に次のように述べている。《経験によって立証されたところでは、良く耕作された 6 モッジョの土地は、5 人家族を養って、なおかつあらゆる租税負担をまかなわしめるに充分である。というのも、大都市の近郊では、大きな販路を容易に得られるため、3 モッジョ、あるいは 2 モッジョ、ときには 1 モッジョでさえ、やっていける家族が見い出せるからであって、ここナポリでは既知の事柄である》（SE. p. 350）。なお、ここでジェノヴェージが、農業の技術的改良に過大なまでの期待を寄せていたことも見逃せない。タル農法に言及した評注16では、当時のナポリ王国内での一般的な播取比を 1 対 8 とした上で、新技術の導入はこれを 1 対 80 以上にするであろうとさえ述べているのである（SE. p. 328）。

（44'）例えば、Augusto PLACANICA, *Alle origini dell'egemonia borghese in Calabria, Salerno-Catanzaro*, Società editrice meridionale, 1979, p. 106等を見よ。1783 年のカラブリア大震災後の復興計画の基軸として設立された「教会財産管理公団」Cassa Sacra による修道院領売却の過程を膨大な史料を駆使して克明に分析し、独立自営農民の創出による根底からの社会改革を夢見た啓蒙思想家達の希望が、やがて幻滅へと転じていく様相を見事に描き出したこの大部な研究の全てをここで紹介することは到底不可能だが、行論上極めて興味ある統計的数値を若干例示しておきたい。カラブリア全域中でカタンザーロ周辺部とレッジョ・ディ・カラブリア周辺部とは極めて対照的な性格を示している。それは両地域における修道院領売却の結果を示す次の表からも明らかであろう。

	Catanzaro 周辺	Reggio di Calabria 周辺
農地および森林の総面積	184, 954	43, 071
売却件数	524	567
売却地の総面積	4, 170. 08	276. 07
売却総額（ドゥカート）	247, 468. 46	128, 830. 20
購入者数	302	262
1 件の売却あたりの平均面積	7. 96	0. 49
1 ヘクタールあたりの平均価格	59. 34	466. 66
購入者 1 人あたりの購入件数	1. 74	2. 16
購入者 1 人あたりの購入面積	13. 81	1. 05
購入者 1 人あたりの支払い額	819. 43	491. 72

（op. cit., pp. 47-53 より作成。尚、面積単位としてトーモロが用いられている箇所は、すべて 1 tomolo = 1/3 ha としてヘクタールに換算した）

何よりも地価の極端な格差が目につくが、これは、カタンザーロ周辺では粗放的な穀作・牧畜経営に基盤を置く大土地所有が優勢であったのに対し、レッジョ・ディ・カラブリア周辺では集約的な果樹栽培が盛んに行われていたことの反映である。そして、購入者に関していえば、前者の地域では領主乃至都市貴族層が大多数であったのに対し、後者の地域では商人層の他にかなりの数の農民層が加わっていたらしい（氏名に don や dottre 等の称号を冠していない購入者が半数近くを占める）と考えられている。無論、こうした多額の購入資金をどのようにして調達できるかこそが問題なのであって、全体としてみれば、この修道院領売却から恩恵を受けた農民はごく限られた一握りの富裕層にすぎなかったと言わねばなるまい。

態は現実には農民層内部における相当程度の階層分化を背景とするものであり、しかもこれらの作柄の便宜品・奢侈品的な素材の性格からして、その生産への極端な傾斜・特化はモノカルチャー的なプランテーション型農業へと容易に再編される危険に曝されていた。この点はジェノヴェージにあっては未だ明瞭に自覚されてはいないのであって、農民の自給的必要を十分に満たした上で多様に展開していく農業という構図が理念的に描きだされるに留まっている。「地主」*proprietary*と「零細(日雇い労働者の)農民」*braccianti*という社会的2大「階級」*classe*の分裂を前提とした南イタリア経済の理論的分析は「農業資本主義のイデオログ」ジュゼッペ・パルミエリ『公共の繁栄』・『国富について』を俟たねばならない^(44'')。

ともあれ、「商業汎論」に議論を戻せば、商品生産者としての農民像の描定は次にはその再生産の条件としての流通を問題とすることになる。ジェノヴェージはまず「過度の奢侈」*soverchio lusso*が、不生産的な技芸や就業の増大によって富裕を減少させることを指摘する⁽⁴⁵⁾。奢侈の問題は後にまた外国貿易との関連でも再び論及されている。ジェノヴェージの奢侈論は18世紀南イタリアの社会経済思想の展開において重要な位置を占めているので、次節で改めて詳論したい。今は彼の貨幣論・利子論へと急ごう。

《貨幣 *danaro* は、あらゆる交換可能な財 *cose mercatabili* の記号 *segno*・表象 *rappresentante* となったため、同時にまた、あらゆる勤労と労働の精神 *spirito*・魂 *anima* の如きものである⁽⁴⁶⁾》

価値論そのものはここでは明示的に扱われていないが、貨幣がそれ自体としてではなく、労働生産物の交換を媒介するというその機能において重視されている点は看過できない。このゆえにこそ、ジェノヴェージは貨幣の「流通」*circolazione*や「循環」*giro*の加速

化を要求しているのである。

《私は流通 *circoli* と言った。何故なら、以下のことを知って欲しいからである。淵に淀んだ水ではなく、大地に遍く行き渉る水こそが土地を潤ませ肥沃にする。そのように、未鑄造の金銀や埋もれて遊んでいる貨幣ではなく、循環している貨幣が勤労に活力と刺激を与えるのである。このようになわけて、金銀や貨幣を大量に有する国民であっても、それが流通しない時にはその勤労を発揮するための起動力と手段を欠き、非常な富の表象に囲まれていながら貧窮することになる⁽⁴⁷⁾》

では、貨幣流通を加速するにはどうしたらよいのか。ジェノヴェージは、諸国民が紙幣のみならず手形や為替をも貨幣を代位するものとして用いていることに触れている。だが、こうした商業信用の具体的な様相については説明しないままに、利子の問題へと筆は進められている。すなわち、《貨幣のあまりに高い利子は、農業・製造業・商業を停滞させて公共の富裕の衰退の原因となる》と述べて、「高利」*usura*を批判するのである。資本不足の解消が求められているのであるが、その具体策はやはり示されないままである。ジェノヴェージは、ロックの、利子の高低は国家の無関心とするところであって法によって利子率を低下させることはかえって有害である、という説をやや当惑げに紹介し、確かに他国の為政者はこうした法を実施してもうまくいかなかったが、イングランド人達はこうした法に全く関心を払わなかったこと、にもかかわらず、その間に利子率は6%から3%にまで徐々に低下していったこと、を述べて、この《広大かつ複雑な主題》に自分は立ち入る意志はないと言って、読者にはデューやヒュームやガリアーニの著作の参照を勧めるに留まっている⁽⁴⁸⁾。

以上でジェノヴェージは農業についての主観的な論

注(44'') Giuseppe PALMIERI (1721-1793), *Riflessioni sulla pubblica felicità relativamente al Regno di Napoli*, Napoli, Vincenzo Flauto, 1788 (2a ed.). Id., *Della ricchezza nazionale*, Napoli, Vincenzo Flauto, 1792. 「農業資本主義のイデオログ」という評価は, Aurelio LEPRE, "Sul pensiero di Giuseppe Palmieri", in: Id., *Contadini, borghesi ed operai nel tramonto del feudalesimo napoletano*, Milano, Feltrinelli, 1963 が明確に提出したもので、これに対しては留保意見や異論も多いが他の機会に検討してみたい。

(45) SE. pp.137-38.

(46) SE. p.138.

(47) Ibid. 尚、ジェノヴェージはここに注を付けて、カンティヨンの『商業論』Richard CANTILLON, *Essai sur la nature du commerce en général*, Londres, Fletcher Gyles, 1756の名を挙げている。

(48) SE. pp.138-40. ジェノヴェージは『グレート・ブリテン商業史』第3巻評注5と6でも、貨幣や利子の問題と関連してロックとヒュームに論及している。

及を終えている。貨幣や利子に言及するあたりでは、理論の密度においてはガリアーニに遠く及ばない。けれども「勤労」の観念を通奏低音としたこの簡潔な構成は、国民経済における貨幣や利子という問題の所在をも却って鮮明に浮かび上がらせているのではなかろうか。

国民の便宜・富裕・勢力の第2の源泉は製造業である。ここでジェノヴェージは最初に、国民の年間消費支出の最低6分の1は必需品の製造業（製品）に充てられると述べて、所謂「農工分離（連帯）」の必然性の根拠を彼なりに示した上で、当面は先ずこうした製造業の国内自給を達成することを課題としている。それはまた同時に、製造業の素材的な基盤である農業の振興とも関連して、アカデミーや学校の創設・外国人技術者の招聘等によって新技術の普及を図ることを勧めている。言うまでもなく、当時の南イタリアの余りにも弱体な製造業を育成するには保護主義的な政策が必要とされようが、これは外国貿易を論じる際に改めて問題になろう。

そこで、国民の便宜・富裕・勢力の第3の源泉である商業に移ろう。初めに商業の本質的な性格が問題となる。ジェノヴェージはここでムロンを踏まえて、《余剰を必要と交換すること》という定義を商業に与えている。同時にまた交換の対象となる財については、必需品 *beni di necessità*・便宜品 *beni di comodità*・奢侈品 *beni di lusso* の順に重要度の序列を明らかにしている。これらの財の交換は最初は家と家の間に始まり、やがて村落間から都市（地域）間へと拡大し、最後に諸国民間にまで展開していくものとされる。ジェノヴェージによれば、こうした《恒久的な利益の相互的な紐帯》こそが《文明社会 *civile società* の第1の基礎》である。そして彼は、商業を考察するにあたって留意すべき点を以下のような比喩で示す。

《商業の身体は諸商品である。商業の魂はそれらの循環である。商業の自由はその循環の迅速さに存する》⁽⁵³⁾

商業を促進するとは商品の流通総量を増大せしめることである。それは一方では商品生産の拡大を前提としているが、他方では、流通の円滑化が生産を刺激するという点も含意されている。そのための障害を除去する方法がジェノヴェージの論述の中心課題となるわけである。

「国内商業に関する諸準則」の叙述はまさにこのような課題に応えようとしている。最初に《国内商業は外国貿易の基礎》であることが強調される。農業と製造業の繁栄によって国内市場から溢れた余剰生産物の交換の場が外国貿易なのである。そのような国内商業の確立には商品流通の「迅速さ」*velocità* が要件とされる。これは更に流通における「確実さ」*sicurtà* と「容易さ」*facilità* と言い換えられる。「確実さ」とは治安の確立のことであり、「容易さ」とは「商業の自由」*libertà del commercio*、すなわち国内関税 *dogan* や食糧調達機構 *annona* 等の流通規制を緩和・撤廃すると同時に交通網を整備することである。更にここで再び貨幣の問題が取り上げられる。一部の富者のもとへのその集中は円滑な商品流通を妨げる。そこで、その「均等な普及」のためには、富者の奢侈もそれが国産品を対象とするかぎり有用であると述べられる。また、貨幣に関しては、物価は貨幣流通の、従ってまた商品流通の指標であること、すなわち、高価格は好況の証であること、が指摘されている。⁽⁵⁴⁾

「商業汎論」の最終節は「イングランド人達がある上に彼等の商業を樹立し維持している諸原則」と題されている。そこではこれまでの議論が外国貿易の9つの原則として総括され、保護主義的な通商政策が提起されている。以下にその9原則を要約して示そう。

注 (49) SE, p. 140.

(50) SE. pp. 142-45. 『グレート・ブリテン商業史』第1巻評注17では、ブリュマール・ドゥ・ダンジュールから引用して、ダブリンに創設されたこうしたアカデミーの例を紹介している。ジェノヴェージは、「学問と科学の真の目的についての叙説」の末尾でも、1753年11月26日付けの *Dublin news letter* を引用してアイルランドにおける産業保護育成政策を称賛していた (SE. p. 56)。

(51) SE. p. 146. Jean-François MELON, *Essai politique sur le commerce*, s. 1., 1734, p. 10 参照。

(52) SE. pp. 146-47.

(53) SE. p. 147.

(54) この点は『グレート・ブリテン商業史』第1巻評注11でも、《販路 *smercio* は生産を増加させる》(SE. p. 312) と明確に語られている。

(55) SE. pp. 149-52.

第1に、輸入による支出は余剰物の輸出からの収入によって埋め合わせ以外にないこと。これは所謂「貿易差額」の国民経済の順逆の指標としての重要性の確認といえる。

第2に、製造業の原料を輸出してはならず、必ず製品を輸出すること。

第3に、単なる自給のためだけではなく、商業のための生産を奨励すること。なお、ここで「商業の自由」に関連して、輸出に際しては「時」と「量」には全面的な自由が認められるべきであるが「場所」に関しては制限が必要な旨が述べられている。この発言は、当時の密貿易の旺盛ぶりを念頭に置いて理解せねばならない。

第4に、原料を欠くゆえに製造業も欠いている場合は、あくまでも製品ではなく原料を輸入すること。これはまた、就業を増加させ、それによって農業をも刺激するとされている。

第5に、国産品と競合する製造品の輸入は有害なこと。

第6に、奢侈品の輸入は有害なこと。

第7に、自国の船舶で行われる仲継貿易は有益なこと。

第8に、海運業の振興は、他国の備船となる場合も含めて有益であること。

第9に、《競争における選好は商業の生命》であるから、良質かつ安価な商品の生産のために技術を改良し、輸出関税を引き下げ、輸送費や時間を節約するために交通網を整備すること。

最後にジェノヴェージは以上の議論に対して予想される2つの疑念に答えている。その第1は、商業の学は実際に有効なのだろうか、という疑念である。これに対してジェノヴェージはスペインの復興の例を挙げている。⁽⁵⁶⁾第2の疑念は、もっと根本的に、世界の商業は既に少数の国々によって占められているので新たに参入することは不可能なのではないか、というものである。これに対してはジェノヴェージは、《知識と意欲》をもって立ち向かえば如何なる悪条件をも克服しうる、と説くのである。

以上の如く、ジェノヴェージの「商業汎論」は極めて素朴ながら一しかし、それゆえにこそ却ってまた鮮明に「勤労」を基軸とした「国民経済」の動態的な展開の見取り図を描き出している。それが決して彼の独創ではないこと、それどころか、パリから伝播した経済学的著作を忠実になぞっているにすぎない面も多いことは否定できない。しかしながら、ここで重要なのは寧ろ当時の南イタリアにあってジェノヴェージがそうした膨大な外国文献を渉猟・吸収し、上述のようにその精髓を要略して示したことの意義である。それが決して一辺倒的な受容に尽きるものではなく、ナポリの思想的伝統を背負った彼なりの深い問題関心に裏付けられた選択的な営為であったことは、当時の南イタリアの他の著述家達と彼を対比することによって明らかとなろう。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）

注 (56) ジェノヴェージは、南海泡沫事件を論評した『グレート・ブリテン商業史』第3巻評注26で、イングランドの国力の源泉は新大陸との貿易にあったが、それが今や対仏戦争によって決定的に枯渇して、替わって国内生産力を整備したスペインが台頭しつつある、という現状認識を述べている（SE. pp. 850-52）。彼はまた、死の1月程前の書簡でも、ローマ帝国やカール5世のスペイン＝ハプスブルグ帝国等、拡張政策を採った国家が全て衰亡の途を辿った例を引いて、《イングランドも危機に直面している》（Lettera a Camillo NORMANNO, 29 agosto 1769, Lettere familiari, (Ed. SAVARESE, pp. 222-23)）と予言している。

(57) SE. pp. 153-63. この最終節は、全文の拙訳が前掲『三田経済学研究』誌上に掲載されているので参照されたい。